

建築研究協会誌

Architectural Research Association

No.35

令和3年10月



口絵1 竣工 鹿苑寺舍利殿 南東面を見る



口絵2 同上 北西面を見る

目 録

巻頭言 文化財建造物と災・害

理事長 高橋康夫 1

遺跡や歴史的建物における文化財保存のための環境制御

京都大学工学研究科教授 小椋大輔 3

特別史跡特別名勝鹿苑寺舍利殿（金閣）屋根葺き替え等工事について

主幹研究員 野々部万美恵 9

瓦大工橘氏の瓦銘

理事 中尾正治 24

コラム 「琉球建築」史話

理事長 高橋康夫 29

コラム 木材保存

常務理事 今村祐嗣 48

研究報告・事業報告 51

名 簿 56

編集後記 57

巻頭言

文化財建造物と災・害

理事長 高橋 康夫

「気候危機」の到来なのでしょうか。今年もまた各地に大雨特別警報が発令され、激甚災害があいついで発生しています。

文化財建造物の保存・継承の視点からすると、鬼神の「しわざ」ともいわれる「災（わざわい）」はもとより、虫、カビなどの菌類、藻類、コケ類などによる「害」もまた、文化財建造物をそこない、悪い結果をもたらすものにほかならないでしょう。

なんとかして災・害を防ぎたいというのは、人の自然な「しわざ」ですので、古くからさまざまな対処がなされてきたことはいまでもありません。とくに20世紀後半になると、大災害が頻発したこともあって、震災・火災・水害・風害・雪害・津波・高潮などの自然災害への多面的かつ総合的な対策が求められました。こうして地域に対しては都市防災、文化財建造物に対しては防犯も含めた総合防災といった統合的な防災の考えかたが出てきたようです。昨年の本誌（34号）には、防災の最新状況に関する大窪健之氏の論稿「文化遺産防災から歴史都市防災へ」を掲載しています。

建造物を自然災害から守る〈防災〉とともに、動植物や微生物などによる「害」から守ること、さらに定期的な修理によって自然な経年劣化に対処することも、古くから行われてきました。一例を挙げますと、腐朽菌による柱の根腐れを補修するために発達したのが根継ぎの技術です。それは堅固でありながら、芸術的といえるほど巧妙になりました。こうした努力を地道に積み重ねることによって建造物の価値を長い歳月をこえて伝えようとしてきたのです。

ところで、近年、文化財建造物の修理などの状況を眺めていて素人ながら気になるのは、文化財建造物の劣化が、経年劣化の常識範囲をこえて激しくなっているのではないかということです。彩色・塗装修理後わずか数年でカビの大被害にあうとか、新材の太い柱が数十年で根元が腐るなど、短期間に大きな被害が出てきているように思います。カビ害は修理によって取り戻された美観をそこないますし、柱の腐朽は、耐震診断の前提である構造体の健全性を害するので、安全が担保されなくなります。いずれも保存修理の根底を揺るがすものでしょう。

急激な劣化・害は、気候・風土、豪雨・台風、高温多湿、結露、敷地環境、使用状況な

ど、いくつもの要因が複合して生じているのでしょう。保存修理の現場それぞれにおいてその原因をさぐるとともに、これまで以上にシロアリ・腐朽菌・カビ・藻類などによる劣化・害（腐れ・変色・汚染）を防ぐこと、すなわち〈防劣〉・〈防害〉に配慮する必要が生じているようです。

文化財建造物には、歳月を重ねることによって得られた独特の情趣があります。〈防劣〉・〈防害〉技術の開発は、文化財建造物を歴年の情趣とともに未来に引き継ぐための大きな課題になってきたように思います。現状を省みてあえて付け加えるなら、総合防災と同じように、多面的で総合的な劣化や害の防止対策、統合的な〈総合防劣〉・〈総合防害〉が求められているのではないのでしょうか。

最後に余談ですが、カビ・藻類は、姫路城（国宝・世界遺産）などのような白漆喰塗りの建造物にも害をもたらしています。さらに亜熱帯や熱帯の石造建造物、たとえば世界遺産である沖縄県の玉御殿（国宝）、カンボジアのアンコール遺跡の建造物などには、とくに顕著な変色・汚染が生じています。本来あるべき美しい姿を失い、価値が大きくそこなわれていると言わなければならない状態です。個人的には、玉御殿が琉球石灰岩と漆喰の真っ白な「王宮」・「神殿」に復旧され、そしてふたたびよみがえった色彩豊かな首里城正殿と並びたつ姿を見たいと思っています。

遺跡や歴史的建物における文化財保存のための環境制御

京都大学 小椋 大輔

1. はじめに

人類の文化的活動によって生み出された有形・無形の文化財は人類の貴重な財産である。文化財の中で、有形の文化財の劣化は、物理的環境の及ぼす影響が大きく、劣化の進行を抑制するために、適切な環境を作り、維持することが必要である。

博物館・美術館に収蔵・展示される美術工芸品等の文化財は、例えば IIC（国際文化財保存学会）、ICOM（国際博物館会議）、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）、ASHRAE（米国暖房冷凍空調学会）などで室内温湿度の環境のガイドライン^{1), 2), 3)}が設定され、国内では文化庁の指針⁴⁾として温湿度の基準が定められ、適切な環境制御が一般的に空調等によって行われている。

一方、遺跡や歴史的建物の中にある文化財は外界気象や周辺地盤の影響を大きく受けて劣化が進行するが保存のための環境の基準は特に設けられていない。従来、遺跡等の保存対策としては、化学的保存処置である合成樹脂で固めることが多く行われてきていた⁵⁾。

近年は、文化財保存における動向としては、1980年代から「予防的保存（preventive conservation）」が叫ばれ、現在の世界の保存の考え方は、まず文化財である資料に手を加えない保存環境作りが中心におかれ、手を加えないと資料が保存できない場合に修理を行うような考え方になってきている⁶⁾。

この考え方は博物館等の文化財を中心として展開してきているが、近年、遺跡等の保存に関する研究や保存対策の検討において、この理念や技術が採用されつつある⁵⁾。ただし、適切な保存対策を検討するためには、まず遺跡の劣化現象に、外界や周辺地盤の物理環境がどういうメカニズムで影響を及ぼしているのかを理解する必要があり、そこで生じている熱や水分等の移動を定量的に検討する手法として数値シミュレーションの活用がある。ただし、数値シミュレーションを踏まえて保存対策に活かす事例は未だ少ない。

今後、遺跡や、歴史的建物の中にある文化財を対象として「予防的保存」即ち「環境を制御する保存」による対策の検討の必要性は、気候変動問題を考えると益々高まると考えられる。筆者は2007年の高松塚古墳の石室解体時における空調について東京文化財研究所から依頼を受け、銚井修一・京都大学教授（当時）と共に関わらせて頂いたのが、文化財保存に関わるきっかけであった⁷⁾。その後、高松塚古墳劣化原因調査検討会におけるカビ発生に関係する現地での石室温度上昇の要因を、過去の記録や採取可能な材料の物理的特

性を考慮して熱水分同時移動理論を用い数値シミュレーションにより明らかにしてきた⁸⁾
-¹⁰⁾。そこで用いられた解析手法を元に、筆者らが関わってきた装飾古墳（釜尾古墳）と歴
史的建造物（ハギア・ソフィア大聖堂）にある壁画を対象とした研究事例を通じて環境制
御による文化財保存について考える。

2. 釜尾古墳の装飾壁画の保存のための環境設計¹¹⁾

古墳の石室内の石材表面に彩色や彫刻が施されているという特徴を持つ「装飾古墳」は
4～7世紀を中心に造られた古墳の一形態であり、全国で約600基存在し、これらは現地
保存され、コロナ禍以前にはいくつかの装飾古墳では定期的に公開されていた。熊本県熊
本市釜尾町に位置する釜尾古墳は、1769年に発見され、6世紀に築造されたと推定される
装飾古墳である（図1）。古墳内の石室には鮮やかに彩色された装飾壁画があり（図2）、
1921年に国の史跡に指定された。

この古墳は天井石や積石の崩落が生じたことから、1967年に改修工事が行われ、コンク
リートドームで墳丘が再現され、入口に金属扉が設置され現在の姿となった（図1、図3）。
以前は一般公開を行っていたが、現在は、装飾壁画の劣化の危惧により熊本市教育委員会
が判断して一時的に閉鎖状態にある。劣化の原因は長期的に結露水の流下や浸透雨水の落
下が生じることによる顔料の流出と考えられる。

ここでは、釜尾古墳石室内の装飾の劣化原因と推定される装飾表面の濡れのメカニズム
を、明らかにした上で、今後の釜尾古墳において保存・公開の面から適切であると考えら
れる保存施設の改修方法の提案を行うことを目的として以下の検討を行った。

- 1) 一年以上に亘る温湿度計測を石室内、また屋外で行い、季節毎に現地調査を行って
石室内の結露等の濡れ挙動の分析を行った。
- 2) 古墳の石室内温湿度と濡れ性状を熱水分移動解析モデルによる数値シミュレーショ
ンにより再現性を確認し、季節による温度分布の違い（図4）などを考慮し結露発



図1 釜尾古墳の概観 (2013年10月 筆者撮影)



図2 石室内の様子 (2013年10月 筆者撮影)

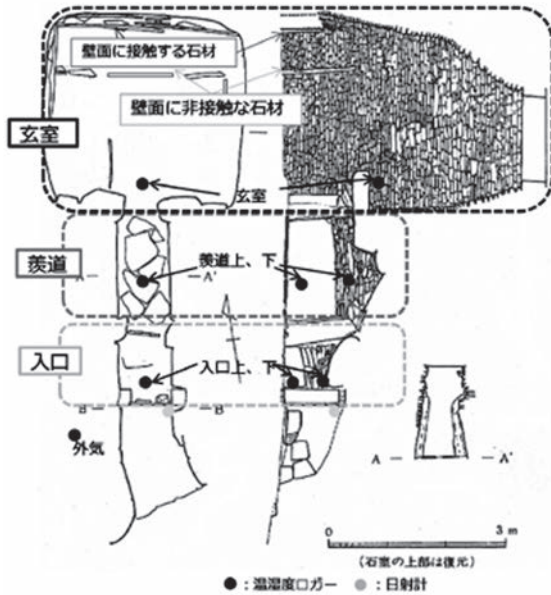


図3 釜尾古墳の保存施設の平面図と断面図

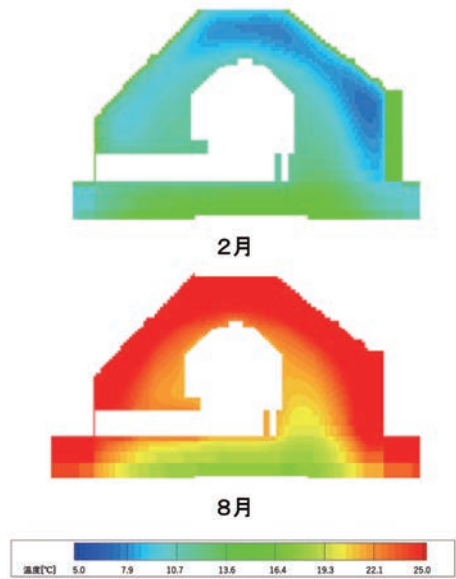


図4 釜尾古墳の石室内温度分布

生のメカニズムを明らかにした。

3) 結露発生メカニズムを踏まえて、この古墳の保存施設の改修方法について、玄室天井部の防水処理に加え、鉄扉の日射遮蔽を行い、墳丘部を断熱する方法を提案した。

ここで得られた成果は、釜尾古墳を維持管理している熊本市の担当者に対して筆者らにより2016年3月に報告した。しかし、その直後に、釜尾古墳は熊本地震（2016年）により被災した。熊本市は「古墳の復旧方法等に対する意見聴取委員会」を2017年4月に立ち上げ、釜尾古墳をはじめとした熊本市内の被災古墳の復旧について検討が進められている。筆者は、その委員を務めている。被災時における一時保存対策や、今後の保存施設の復旧や改修対策も環境制御も重要であり、これまでの研究成果を踏まえつつ検討が行われている。

3. ハギア・ソフィア大聖堂の壁体の雨水浸透が壁面に及ぼす影響^{12),13)}

トルコ・イスタンブールにあるビザンティン建築を代表するハギア・ソフィア大聖堂では、建物の内壁にモザイクやペイントといった壁画が描かれているが、建物上層の第2コーニス（図5、図6）で塩類風化による壁画の劣化が生じている。この主たる要因と考えられる雨水浸透が壁画の劣化に及ぼす影響を明らかにし、その保存対策を提案することを目的として、塩の結晶化に大きく影響する壁内の水分の蓄積や蒸発など、壁体内の熱水分挙動に及ぼす環境因子や壁体構成の影響について検討してきた。

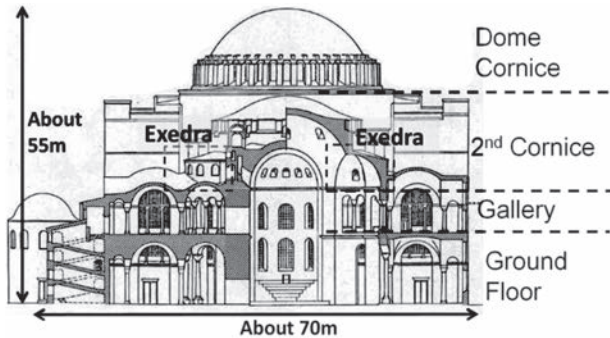


図5 ハギア・ソフィア大聖堂の断面図 (Mainstone (1988)¹⁴⁾ の図を元に作成)

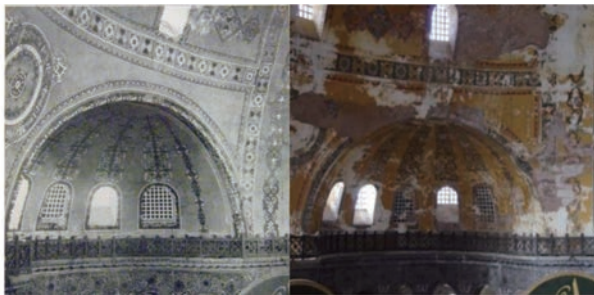


図6 第2コーニスの北西エクセドラの壁画の劣化の進行 (1907年 (Antoniades 撮影)¹⁾、2012年 (著者ら撮影))

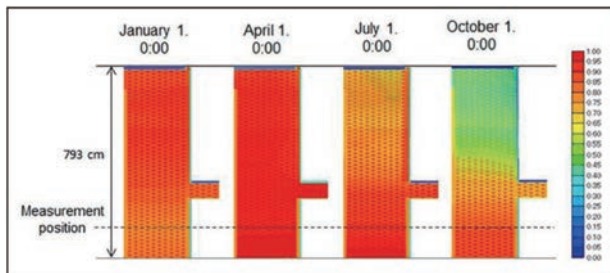


図7 北西側エクセドラの壁体内の水分飽和度の数値シミュレーション結果

現地調査により、大聖堂内部の各部での温湿度計測に加えて、第2コーニスの壁表面の含水率を測定し、建物形状の凹部となる部位で含水率が高く、方位による違いもあること、また含水率と劣化の程度に高い相関関係があることがわかった。

現地で採取した壁の材料に対して測定を行った物性値壁体構成を考慮して熱と水分の同時移動の2次元数値シミュレーションモデルを開発し(図7)、壁体表面の含水率の再現性を確認した。その上で、複数のパラメータを変数に検討を行った結果、壁体の含水率上昇に対して①壁体での結露の可能性が非常に小さいこと、②大きな屋根に降った雨の壁面での流下が大きな影響を及ぼしていること、また③吹き降り雨もある程度壁体含水率の上昇に影響を及ぼしていることを定量的に明らかにした。

数値シミュレーションを用いて適切な水の浸透抑制策を検討し、材料内部の含水率を高めない方法として、水蒸気の透過を変えずに

液水の浸入を抑制できる材料が最も適切な対策となることを提案した。得られた成果は、ここを維持管理するアヤソフィア博物館(当時)に修復を検討する際の参考資料となるように定期的に報告書を提出していた。今後の改修にあたっては、上記成果を反映した対策が行われればと願っている。

4. まとめ

遺跡や歴史的建物における文化財の保存に関して、筆者らが関わってきた装飾古墳と歴史的建造物の内部にある壁画を対象に「予防的保存」即ち「環境を制御する保存」を行うことを目的として、劣化現象の発生メカニズムの解明とそれらに基づいた対策の検討から得られた成果をここでは紹介した。

これらの「予防的保存」を確立するための方法は、以下のようにまとめられる。

遺跡等の文化財はその材料の違いや、設置されている環境が異なることから、劣化現象も様々である。まず、そこで起きている現象を適切に把握するためには、一年以上に亘る屋外や文化財の置かれている物理環境の計測が必要であり、文化財がどの時期に劣化が進行する懸念があるのかを丹念に調査する必要がある。また文化財そのものに接触は出来ないため、その物理特性を把握することは、似たような部材や、代替可能な部材の物理特性を理解することによらざるをえない。これらの基本的な情報を把握した上で、目的に応じた物理現象の把握を可能とする理論（熱水分同時移動理論、CFD等）を基本とした対象の文化財の周辺環境を考慮した数値シミュレーションモデル（解析モデル）を作成することができる。解析モデルの妥当性は、必要とされる実態の再現性から判断され、解析モデルを用いた定量的予測を元にして環境制御による各種保存対策の効果の比較が事前に可能となる。

しかし、このような対応を一つ一つの文化財全てに対して行うことは難しい。従って、文化財の劣化原因と対策として、可能な範囲で類型化をしっかりと行っていくべきと考えられる。そのような観点もあって筆者は、2014年3月にまとめられた装飾古墳ワーキンググループの報告書の装飾古墳の保存・管理の在り方の石室等の保存環境の調整¹⁵⁾について執筆を行い、装飾古墳の類型化に繋がる整理を行った。

今後は、主に水分に由来する材料の亀裂の発生など文化財の劣化現象（塩類析出、凍結、乾湿など）による材料変形等の予測を考慮して、保存のために固める技術とのバランスをとりながら「予防的保存」をさらに検討していきたいと考えている。

図表出典

- (i) Antoniadēs EM, Ekphrasis tēs Hagias Sophias: ētoi meletē synthetikē kai analytikē hypō eposin architektonikēn, archaiologikēn kai historikēn tou polythrylētou temenous Kēnstantinoupoleēs, VOL 3. Leipzig: Kommissionsverlag von B.G. Teubner, 1909.

参考文献

- 1) Julian Bickersteth: IIC and ICOM-CC 2014 Declaration on environmental guidelines, Studies in

- Conservation, pp.12-17, 2016. 08.
- 2) Gaël de Guichen: Climate in museums. Measurement, ICCROM, 1984.
 - 3) ASHRAE, Museum, Galleries, Archives, and Libraries, In ASHRAE Handbook-HVAC Applications, Chapter24, 2019.
 - 4) 文化庁、文化財（美術工芸品）保存施設、保存活用施設設置・管理ハンドブック、2015.03.
 - 5) 建石徹、模擬古墳：遺跡・遺物の保存と活用を考えるための実験的取り組み（1）史跡の現地保存と遺跡の露出展示－取り組みの理念と歩み－、考古学研究、第67巻、第1号、pp.12-15、2020年6月.
 - 6) 三浦定俊、佐野千絵、木川りか、文化財保存環境学、序文、朝倉書店、2004.
 - 7) 小椋大輔、犬塚将英、銚井修一、石崎武志、北原博幸、多羅間次郎、高松塚古墳石室解体時の壁画保存のための温湿度環境の制御、保存科学、第47号、pp.1-9、2008.
 - 8) 小椋大輔、銚井修一、李永輝、石崎武志、三浦定俊、過去の高松塚古墳石室内の温湿度変動解析－保存施設稼働時の気象条件の影響と、発掘直後の仮保護施設の影響－、保存科学、第48号、pp.1-11、2009年3月.
 - 9) 小椋大輔、銚井修一、李永輝、石崎武志、過去の高松塚古墳石室内の温湿度変動解析（2）墳丘部表面の植生等の変化が石室内温度変動に与える影響、保存科学、第49号、pp.73-85、2010年3月.
 - 10) 小椋大輔、銚井修一、李永輝、石崎武志、過去の高松塚古墳石室内の温湿度変動解析（3）吸放熱パネルへの送水温度および入室が石室内温湿度変動に与える影響、保存科学、第49号、pp.87-96、2010年3月.
 - 11) 芥子円香、小椋大輔、銚井修一：釜尾古墳における装飾壁画の保存のための環境設計、日本建築学会環境系論文集、第81巻、第730号、pp.1095-1104、2016年12月.
 - 12) 水谷悦子、小椋大輔、石崎武志、安福勝、佐々木淑美：ハギア・ソフィア大聖堂の壁体の雨水の浸透が壁画の劣化に与える影響、日本建築学会環境系論文集、第80巻、第716号、pp.1001-1011、2015年10月.
 - 13) Etsuko Mizutani, Daisuke Ogura, Takeshi Ishizaki, Masaru Abuku, Juni Sasaki: Influence of wall composition on moisture related degradation of the wall surfaces in Hagia Sophia, Istanbul, Journal of Building Physics, Online first, 2021.05.
 - 14) Mainstone RJ: HAGIA SOPHIA Architecture, Structure and Liturgy of Justinian's Great Church, Thames & Hudson, 1988.
 - 15) 古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ、古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書、pp.34-54、2014年3月.

特別史跡特別名勝鹿苑寺舍利殿（金閣） 屋根葺き替え等工事について

主幹研究員 野々部万美恵

1. はじめに

鹿苑寺（通称金閣寺）は、臨済宗相国寺派の山外塔頭の一つで、舍利殿（金閣）が有名なため、巷では金閣寺と称されることが多い。

位置は、京都盆地の北西部、衣笠山と大文字山の麓で、斜面を利用して築かれた境内には、安民沢と鏡湖池という二つの大きな池があり、堂宇と池泉回遊式庭園が見事に調和する。庭園の中心的存在の鏡湖池は、山並みを背景に池中に葦原島や鶴島等の島々、諸大名が競って献納したことから名づけられた細川石や畠山石と呼ばれる数々の名石、松等の樹木を配し、九山八海を表現している。その鏡湖池の北東の畔に、舍利殿は建つ。緑と水に恵まれた美しい日本庭園に、舍利殿の優美な三層楼閣が相俟り、常に多くの参拝者が訪れている。境内の主要な部分は、特別史跡特別名勝に指定され、世界文化遺産「古都京都の文化財」の構成要素に登録されている。

鹿苑寺では、特別史跡特別名勝庭園の整備として、平成28年度から国庫の補助を得て南池跡を中心とした整備事業が進められていたが、特別史跡特別名勝の主要構成要素である舍利殿の屋根葺き替え及び部分修理も、その一環として補助事業に組み込まれた。

舍利殿の工事は、令和2年(2020)9月1日に補助事業の計画変更の許可を得て着工し、令和3年(2021)3月31日に竣工した。

2. 鹿苑寺のあゆみと舍利殿の歴史

鹿苑寺が所在する北山という地名は、平安時代に遡るといわれ、西園寺公経が、この辺りを所有していた伯家から所領交換で入手した地に氏寺（後に山荘）を築くこととし、元仁元年(1224)に盛大な落慶法要を行ったとされる。西園寺公経が造り上げた西園寺・北山第の趣は、比類なき斬新なものと記され、庭に高さ45尺（13.6m）の滝や美しい池があり、地上の仙境、此岸の浄土と称されたとも伝わるが、詳らかでない。

時が流れ、西園寺家が衰退するとともに北山第も荒廃し、その後、室町幕府三代將軍足利義満が一带を譲り受け、洛中の室町殿に代わるものとして、応永4年(1397)に北山殿の造営に着手した。北山殿は、義満が政務を執り居住した北御所、夫人日野康子のための南御所、後光厳院妾の崇賢門院のための御所の三所をまとめた広大な境域が設定され、惣門

が設けられていた。禅に傾倒した文化人でもあった義満は、北山殿の北御所では庭園、建築共に粋を極め、中でも趣向を凝らした建築が応永5年(1398)竣工の舍利殿であった。舍利殿は、一階に釈迦三尊が安置され、二階は観音殿、三階は仏舎利が納められ、三層楼閣の舍利殿を中心とした庭園や建築で極楽浄土を表していたとされる。造立当初は、舍利殿、重々殿閣、三重殿閣などと呼ばれ、金閣と呼ぶようになったのは応仁の乱後のようである。

義満は、元寇以来中断していた中国との国交を再開し、ここで明の勅使を迎え新しい文物を入手するだけでなく、和歌や連歌、管弦等の催しに興じ、名画を収集し、北山文化を花開かせた。また応永15年(1408)に後小松天皇の行幸を仰ぎ、盛大な宴が催されたことは「北山行幸」として有名である。

義満死後、応永26年(1419)南御所に居住していた夫人の康子も亡くなると、南北御所の寝殿等は南禅寺や建仁寺等へ寄進された。残った境域と舍利殿をはじめとする建物は、義満の遺言により、息子義持が夢窓疎石を勧請して禅宗寺院とし、義満の法号から「鹿苑寺」と名付けられた。

やがて応仁の乱が始まり、鹿苑寺は西軍の陣地となった。多くの建築は破壊され戦火に遭い、樹木や石組も大きな被害を受けたが、鹿苑寺は舍利殿等わずかに残った建物を礎に、寺院として徐々に堂舎を再建していった。近世に入ると有力住持の尽力もあって、為政者による経済的基盤が固まり、現況の成立はほぼこの時期頃とされる。

明治時代に入り、庇護者を無くし経済的基盤を失った鹿苑寺は、廃仏毀釈等の時代の波に翻弄されながらも、法灯を護り続けた。永年の維持継続の努力が結実し、境内主要範囲は、史跡名勝天然記念物保存法に基づき、大正14年(1925)国の史跡名勝に指定され、文化財保護法に基づき昭和31年(1956)には特別史跡・特別名勝に指定された。舍利殿は、明治30年(1897)に古社寺保存法に基づき特別保護建造物に指定され、昭和4年(1929)国宝保存法施行に伴い(旧)国宝に指定された。

早くから名建築として知られた舍利殿は、歴史上の著名人が数多く訪れたことが日記などの記録に残り、義満時代の建造物として境内に唯一残る遺構としても高く評価されていた。そして明治37年(1904)6月から同39年(1906)にかけては、京都府技師松村重光と武田五一の指導により、舍利殿の解体修理が実施された。その後惜しくも舍利殿は、昭和25年(1950)に焼失したが、再建される際には明治の修理の調査記録と図面が大きく役立ったという。

現在の舍利殿の再建は、昭和27年(1952)4月1日着工、昭和30年(1955)9月30日に竣工した。その後は、昭和55年度に屋根葺替え、昭和62年度に内外の金箔や漆の修理、平成14年度に屋根葺替え及び金箔修理を行ってきた。

3. 舍利殿の形式及び規模

舍利殿は、鏡湖池の北岸東寄りに、南を正面とする三階建て木造楼閣建築で、方丈や庫裡、書院など寺院施設とは少し距離を置き、独立して建つ。舍利殿の南・西、東面の南半、北面西半は池に臨み、東面北半と北面東半面は陸地に接する。

一階は寝殿造形式の住宅風、二階は和様仏堂風、三階は禅宗様仏堂風と、各階がそれぞれ違った形式を持ちながら纏まり、かつ二、三階を金箔で覆ったところに特徴があり、一見すると重厚な一階から二、三階は軽やかに浮いたように見える。そして鏡湖池に映る姿は、周辺庭園や背後の山麓の景観と相俟って、先後に例を見ない独自の世界観を醸し出しており高く評価されている。

平面規模は、一階と二階が同規模で、桁行五間（38.61尺）、梁行四間（28.08尺）、三階は方三間（18.06尺角）である。柱は面取り角柱で、一階は六寸角、二階は五寸角で、側通りの一、二階通し柱は扱き柱になっている。三階の柱は下層の南北行大梁に直交して配された土居桁を土台に組み上げられている。土居桁は、二階の柱通りに拘束されることなく配置されており、三階の柱が下層の柱通りから離れ、自由に位置する理由が判る。

屋根は柿葺で、最上層は宝形造り、頂部に載せた露盤や鳳凰は銅鑄物に金箔押しである。第二層は、三階の縁腰組から葺き降ろすが、三階平面の方形に対し二階は矩形のため隅木は振れ隅で納められており、結果、東西の屋根勾配は引き渡しで三寸を切るほどの緩いものになっている。

平面構成は、一階が南北三間、東西五間の間仕切りの無い一室で、北の背面壁に接して西寄り三間に須弥壇を設け、東側には南から北へ向いて階段がある。内部の仕上げは漆喰壁で、床は拭板敷、鏡天井とする。南面の東西五間、南北一間の広縁は吹放しで、主室と同じく床は拭板敷、鏡天井とする。柱間装置は、広縁境は全て蔀戸を吊り、東西面は南端一間が妻戸とし、他は漆喰壁で仕上げる。四周には木口縁を廻らせるが、池に面した南と西面は落縁とし端喰が廻り、上に軽快な意匠の高欄を備える。

二階は、一階からの階段と、それから矩手に西へ向いて三階に上がる階段が設けられた東西二間南北四間の東室と、主室である三間四方の西室に分かれる。東室は、北から一間の位置に幅二間の無目鴨居、長押、板垂壁で内法より上の空間を仕切るが、敷居は無く一室である。東室西室境は一間毎に柱が建ち、引違い舞良戸で仕切る。西室の南面は奥行き一間の広縁とし、広縁に面した三間中央の一間に両開き板扉、両脇は中敷居を入れ嵌蔀を配し、腰は板壁とする。西室の北面にも中央に両開き板扉を配するので、南北向かい合わせに板扉がある構成となる。西面は三間とも板壁で、壁に沿って腰掛を造りつける。先述の東室の柱間装置は、南面は内に2枚障子を建て込む4枚引違い一二三の吹き寄せ舞良戸、

西面は広縁に向かって片引き内障子付き引違い舞良戸で仕切り、北・東面は板壁である。東室西室とも内装は、床壁建具とも板扉を除き呂色漆仕上げ、板扉は金箔押しで、鏡天井は彩色が施されている。外部は、四周に高欄のある縁が巡り、縁下は腰組とする。腰組は白木で、縁板は黒漆仕上げ、縁板木口や壁、軒廻り、高欄は金箔を押し。側通りの柱頭部は頭貫を通し、柱頂部と柱間中央に斗を置き、軒桁や梁を支える。軒廻りは、二軒で疎垂木を配し、地垂木や隅木の木鼻は禅宗様とし、垂木間は板軒天井に仕上げる。

三階は一室で、四面とも中央に両折両開き棧唐戸、両脇に内障子の付いた花頭窓を配する。床は拭板敷呂色漆仕上げ、板壁と鏡板天井は金箔を押し。四周の縁は室内床より一段高く、禅宗様式の高欄が廻る。縁床は呂色漆仕上げ、外壁板や軒裏は金箔を押し。縁の北面東寄りに呂色漆塗の階段があり、縁への出入口に同じく呂色漆仕上げの跳ね上げ板扉が設けられている。柱は面取り角柱で四・五寸角、地覆・内法貫・頭貫で柱相互を固める。斗拱は禅宗様で、柱上に斗を置き出三斗で軒桁を支え、中備えに間斗束を配する。

一階の西へ突出した漱清は、^{そうせい}桁行10.05尺梁間7.02尺の柿葺切妻屋根で、棟は熨斗瓦積みとなり、獅子口を備える。四隅に柱が建ち、うち西端の2本には名栗仕上げの控え柱が付く。低い腰板が廻り、北面西面には腰掛が付くため腰貫の上に高欄が付き、壁の無い軽快な意匠の建物である。

各階は、それぞれ一階は法水院、二階が潮音洞、三階が究竟頂と名付けられている。

4. 修理概要

①破損の状況

修理前の舍利殿の状況は、前回修理から18年が経ち、勾配が緩やかな柿屋根は隅廻り（図3）や下層雨落にあたる部分に風食等の傷み（図4）が見られるようになっていた。

柿板は先端の風食が進み、木口より控えて施工した葺込銅板が露出していた（図5）。また屋根の破損状況から、一部では野地など下地への影響が懸念された。屋根以外にも、縁板の腐朽（図6）や高欄の一部に緩みが生じており、亀腹は、表面の漆喰塗だけでなく一部は下地まで傷み、一階の縁廻り小口塗は剥離が生じ、各所で小修理が必要な状況であった。

金箔については、軒先などを中心に部分的な剥離や浮き上がり、入隅などに破断が起きていた（図7）。風鐸や軒樋の一部、樋受けには緑青が生じ、今後さらに広がることが明らかであった。鳳凰は鳥が止まり爪や嘴で傷つき箔がはがれ、下地が見えていた（図8）。

②準備

鹿苑寺の参拝者のほとんどは、舍利殿の拝観を主目的に来ており、素屋根足場で覆う修理工事は参拝者の希望を損ねるだけでなく、様々な方面への影響も懸念され、着工のタイミングを検討する必要があった。鹿苑寺では、折しもコロナ禍による入国制限や自粛に伴い参拝者が激減したことを好機と捉え、急遽この時期を利用して保存修理工事を実施することにした。

保存修理工事は、建築工事と園路復旧等工事、金箔（漆）工事の三つの請負工事と、金箔の原材料購入に分けて発注した。施工業者は入札及び見積合わせで決定し、事業の許可を得た令和2年9月1日以降に着工した。

③工事概要

工事は、舍利殿の柿葺屋根の修理を中心に実施した。

最初に、資材の搬出入路の確保を行い、素屋根足場建設や工事用仮設電気を設営した。

A. 建築工事

A-1. 屋根工事

主な材料

柿平葺板：厚さ1分長さ1尺 木曾産天然樫赤味手割板

上目板：下厚さ2分 上厚さ1分 長さ1尺 木曾産天然樫赤味手割板

水切銅板：t0.4幅9cm

葺込銅板：平葺部 t0.3幅6cm上 隅から平へ1尺までの範囲 t0.3幅18cm上

竹釘 長さ8分～1寸2分

柿屋根は、基本方針として軒付水切銅板から上を葺き替えるため、既存の葺き方を調べながら解体を進めた。但し第二層の軒付は、傷んでいる東面の一部を解体した。

復旧は、軒付上端を必要に応じて補修し、必要な陸と反りを確保し、二重になった水切銅板の上板のみ、出や垂れの寸法を既存に倣い取替えた。上目板は、二枚重ねに真鍮釘#18×25mmで留めた。平葺は、軒口より葺足を2分4分6分8分の込足とし、以降葺足1寸で葺き上げた。葺き方は、二足毎に墨打ちし、目板を並べ竹釘を1.5～2.0cm開きに、真鍮釘を併用しながら前後二通り打ち付けた。葺込銅板は、六足毎に葺足より2分程度控えて取り付けた。出隅は平葺足と取り合わせ良く、地斑や継割れしないよう、慣れ良く廻し葺き、葺込銅板は、五足毎に平葺と同じく葺足より2分程度控えて取り付けた。

漱清の棟瓦は、再使用するため丁寧に取解き、土や漆喰を丁寧に落として清掃した。獅子口は欠落した漆喰塗を復旧した。

品軒は、既存の出や勾配に倣い、小軒板を1枚毎に竹釘又は要所を真鍮釘で打ち付けた。所定の厚みにした後、木口鉋仕上げとした。

A-2. 木工事

一階の縁板は、北東隅を取替えたほか、小口の劣化が著しいところを矧木した。矧木の際は、既存の板と杢目が合うように材料を吟味し、板の接着面が増えるように鋸歯形の切込みを入れた。東面南寄りの縁束は痩せて上下動するため、縁葛との間に埋木を施した。一階の落縁の高欄は、東面北端が緩んでいたため、床下から縁束と長ビスで曳き、枘穴が緩んだ貫は栓で固めた。野地や野垂木は、第二層目隅を中心に、傷んだ箇所を取替えた(図10)。これは、屋根の勾配が特に緩いところにあたる。組立の際には、当初の仕様を遵守した。

漱清は、舍利殿境の飛沫^{しぶき}除け板を大ばらしで取り外し、屋根施工後元通りに復旧した。

A-3. 金属工事

銅板は、JIS H 3100に基づく「銅及び銅合金の板及び条」に則ったものを使用した。

舍利殿の屋根の雨漏りは、直ぐに金箔や漆に影響が及ぶため、平成15年の修理時に野垂木の上に捨て銅板を入れていた(図11)。範囲は、第三層の隅と第二層の長辺方向は隅、短辺方向は全面である。短辺方向は、この建物の中で最も勾配が緩く、隅では逆勾配が生じており、最も雨漏りの心配なところである。捨て銅板は、漏水した場合に備えて釘穴から漏水しないよう裏から凸型に叩き出した念の入った加工がされており、さらに隅に近いハゼは立てて縦に流れやすくしてあった。また流れた水が凸部に至らず、下に流れるように誘導する棒状の銅板も貼り付けてあった。幸い、捨て銅板は状態が良好であったのでそのまま残し、一部棒状の銅片が剥がれていたため、旧規に倣い両面テープで留めた。銅板に空いた過去の釘穴はハンダで埋めた。第二層の柿と縁前包の仕舞は、旧規に倣いt0.4銅板製水切を廻した。

露盤下の品軒は銅板一文字葺きで、表面が傷んでおり全面張り替えた。

第三層北側の軒樋を流れる雨水は、東西の末端で直交する軒樋を飛び越え下層の屋根に直に落下していたことから、柿が損傷する要因になっていた。明治時代や昭和の再建時の写真によると、溢れ止めを設けていたことが認められ、それを参考に今回は

溢れ止めを復旧した。

漱清軒先の捨て銅板は舍利殿と仕様が違い、位置範囲は野垂木の上に軒先から流れの半分まで全面に敷いてあったが、釘穴に対しての工夫は無かった。傷んでいたため既存に倣い、t0.35流れ0.9m、上下仇折りして取替えた。漱清の獅子口下は旧規に倣い、柿の上に銅板 t0.35 を敷き込み、獅子口を載せた。これらの位置寸法は、修理前の仕様に倣った。漱清屋根の東側と二階の縁の取り合いは、修理前と同じく屋根面に銅板 t0.35 の這樋を新調し、復旧した飛沫除けと屋根の取り合いは水切銅板を取替えた。

A-4. 左官工事

亀腹は、池側に足場を組んだ結果、全面修理が必要と判り、施工範囲を追加した。池の水面に近く湿度が常に高いため、傷みが早かったようである。工事は水面ぎりぎりに足場板を並べ、這いつくばっての作業となり困難を極めた。

傷んだ部分をこそげ落とし、必要に応じて荒付、中塗りし、漆喰で上塗りした。漆喰は在来に倣い、石灰、苧苧、銀杏草を水で練り合わせ、金鏝で平滑に仕上げた。

A-5. 塗装工事

第一層の縁板や縁隅木、手摺等と、一部傷みが見られる第二層の腰組の小口塗は、既存の塗装を完全に落として塗り直した。先行して既存の材料を調査したところ、胡粉と酸化チタンをアクリル溶剤に混ぜたものが使われており、平成15年に施工されたことも判った。検討の結果、耐候性を考慮して、胡粉と酸化チタンは既存とほぼ同じ6：4の比率とし、アクリルエマルジョン（PRIMAL AC2235）と水で溶いたものを使用し、4回塗りとした。

露盤下の品軒に付いている丸環は鋳鉄製で、錆を落とし塗装し直した。色は茶系とし緑青が付き始めた、緑と茶が交じった状態にし、ウレタン系つや消しクリア塗装とした。

A-6. 避雷工事

避雷針は、既存を素屋根に移動させ不足分を繋いで仮設とした。

突針は修理前と同じく鳳凰を利用し、引き下げ鬼撚り銅線の固定は、柿と同じ位置で釘止めできる特注の取付金物を用意し、雨漏りの原因にならないように配慮した。色は、碍子を茶色に塗装し見栄えにも配慮した。仮設撤去後、コンクリート支柱や接地抵抗は既存のままに接続し、所定の抵抗が取れていることを確認した。

B. 園路復旧等工事

仮設園路は、建築工事の資材搬入及び仮設足場や資材置き場に必要最小限の範囲において、白砂や苔を一時仮置き移動させ、足場解体後復旧した。仮設園路設置時に一時取り外した竹柵は、劣化していたため新しいものに取り替え、苔や砂を復旧した。

C. 金箔（漆）工事

材料は、鹿苑寺が五倍箔の金箔を支給した。箔の仕様は下記による。木部の漆塗りは、調査した結果、搔き落として塗り直すには至らず、金箔が剥離、遊離した欠落した箇所を小修理する方針に変更した。

頂部の鳳凰は素屋根から吊り上げて固定し、三層屋根上に仮設棧橋とステージを設けた足場で金箔の部分修理を行った。露盤と品軒は三層軒足場に降ろし、露盤は金箔の部分修理、品軒は銅板を張り替えた。二層三層の風鐸は全て外して工場へ運び、金箔を全て落して錆止めの漆焼付加工を施し、金箔を張り直したうえ、つや消しのアクリルクリアを仕上げに塗布し、元の位置に戻した。風鐸の吊り金具は、平成14年度に留め金から外して耐久性を確認されており、今回は錆もほとんどなかったためそのまま保持した。

鹿苑寺は、舍利殿において平成14年度の修理以降、箔押師によるメンテナンスを継続的に実施している。昭和の修理で施工された金箔の下地漆は、六十を超える工程を経た国産本漆塗で、その技術と材料は今では入手し難く、歴史的に浅くとも保護に値するものであるが、鹿苑寺が舍利殿の経年変化を観察してきた結果、金閣の華麗な姿を参拝者が常に拝観できる環境を整えるためには、きめ細かな維持管理が不可欠と判断された。そのためほぼ毎日、開門までの間にメンテナンスを重ねている。舍利殿は、池に近く湿度が高い厳しい自然環境に晒されている。そのうえ、多くの参拝者の土埃が無い上がり付着し風で擦れるという、金箔や漆にとって必ずしも好ましい環境ではない。

金箔の厚みは、昭和30年の復元当時は一般品（約 $0.1\mu\text{m}$ ）を用いたが劣化が著しく、昭和60年度の修理時に材料工法の再検討がなされた。その結果、一般品の金箔では厚みが薄く下地の漆まで紫外線に曝され、短期間の劣化に至ったと結論付けられた。そして箔の厚みや下地漆の調合などに検討を重ねた結果、金箔は特別に注文した五倍箔を使用し、重押しで仕上げることにされた。その後平成14年度の修理時に再検討がなされ、第二層北面の傷みが最も大きく、第三層南面は比較的状態がよいと判り、考察の結果、池などの湿気と日光による乾燥の度合いなどが影響していると推測され、金

箔の下地漆により強度を求め、厚く塗り込んで金箔の表面に滲み出るように改良した。その後の経年状況もよいため、今回は、その仕様を継承することとした。

D. 舍利殿の金箔

金箔は、109mm角で厚みは通常（約 $0.1\mu\text{m}$ ）の5倍（ $0.5\sim 0.6\mu\text{m}$ ）、金1号色（純金97.66%、純銀1.35%、純銅0.97%）、縁付箔とした。

五倍箔は特注品で、まず延金から澄屋で上澄みを造る。箔屋へ納品される段階で、金は大きき20cm角、厚さ約 $0.8\mu\text{m}$ になっている。製箔工程で通常は、上澄みを11～12の小片にして引き延ばす小間打ちをするが、五倍箔は中央で14.5cm角1枚だけを取り、主紙で仕上げ打ちをする。このあたりの工程が五倍箔と一般品の違うところで、 $0.8\mu\text{m}$ を $0.6\mu\text{m}$ にとわずかしか伸ばせないことから、特に厚みに斑が無いものを厳選しなければならず、質量を計測して選別するなど経験と手間が要求され、限られた職人しか扱えない所以である。紙一杯に打ち上げると16.5cm四方程度になり、所定の寸法（109mm角）に切揃えたものを採用した。

5. おわりに

舍利殿の修理という、またとないご縁をいただいたことに感謝し、所有者である鹿苑寺様をはじめ、本事業に携わられた関係者のみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献（順不同）

鹿苑寺編『鹿苑』鹿苑寺 1995年

鹿苑寺編『鹿苑寺と西園寺』鹿苑寺 2004年

『日本建築史基礎資料集成 十六 書院 I』中央公論美術出版 1971年

● 修理前写真



図1 修理前 西からの全景
奥に方丈庫裏が見える



図2 修理前 南東面全景



図3 第三層屋根南東
柿の隅周辺の傷みが著しい



図4 第二層屋根北西隅の詳細
柿の傷みが著しい



図5 平葺状況
控えて入れた葺込銅板が露出している



図6 縁全体に傍の隙間が広がり、
小口割れや腐朽、小口塗の剥離が目立つ



図7 第二層軒裏
隅が切れ、表面にひびが生じている



図8 鳳凰頂部 箔が捲れ下地が見える

● 工事中写真



図9 素屋根足場建設中と
鹿苑寺が設置した写真パネル



図10 柿解体後 雨漏りによる野地の腐朽状況



図11 腐朽野地板を解体後
野垂木間に捨て銅板がある



図12 第二層南面柿施工中



図13 第二層小屋裏内 昭和61年に取り替えた第三層の床板と下地は裏面も拭き漆が施されていた



図14 軒先の金箔の修理状況



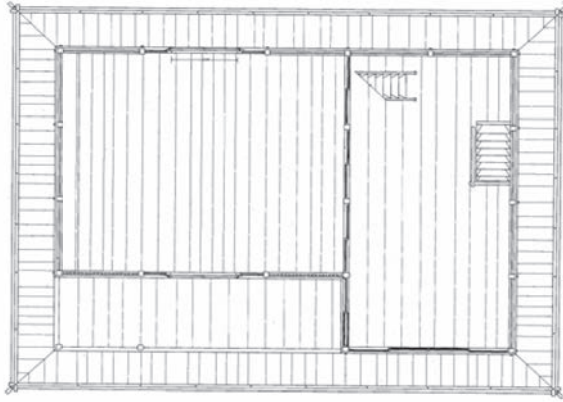
図15 鳳凰の金箔修理



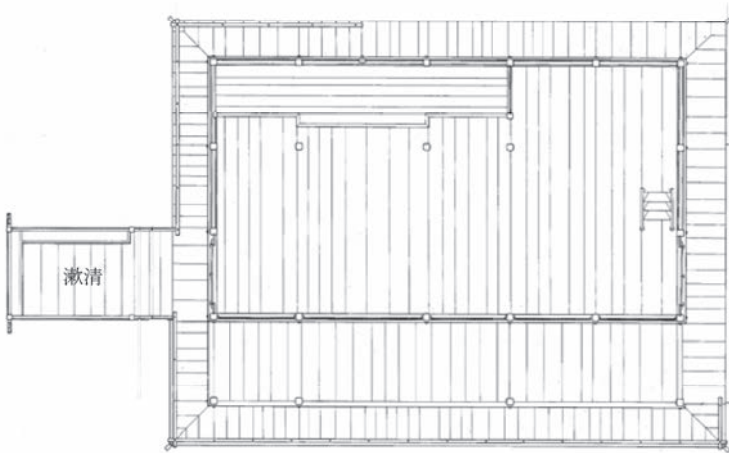
図16 屋根廻り修理完了



三階平面図



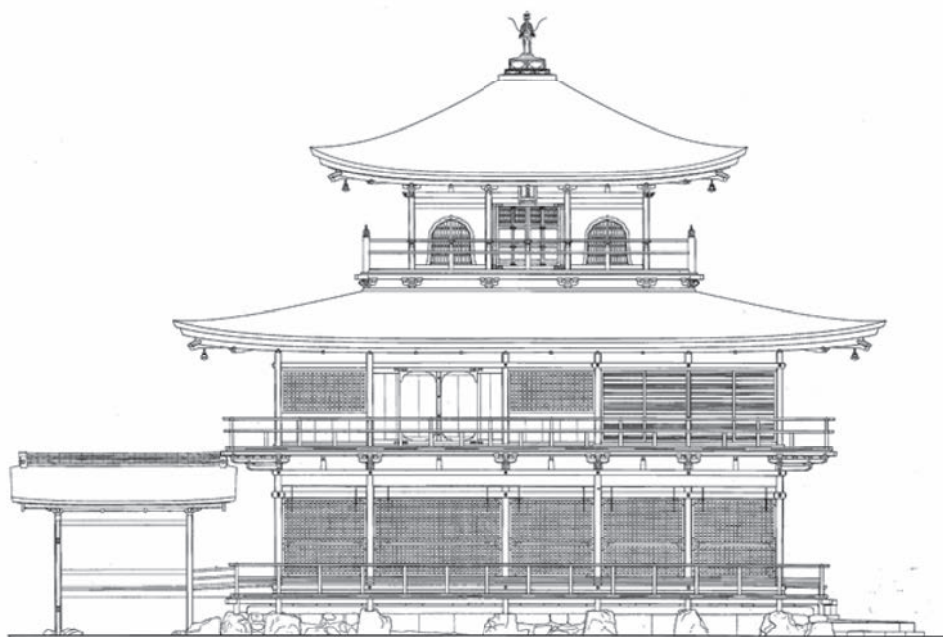
二階平面図



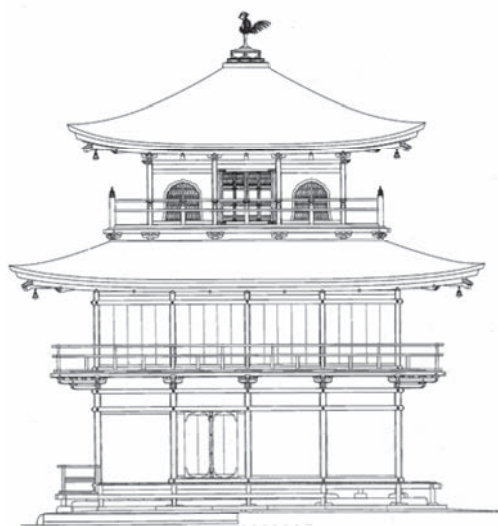
一階平面図



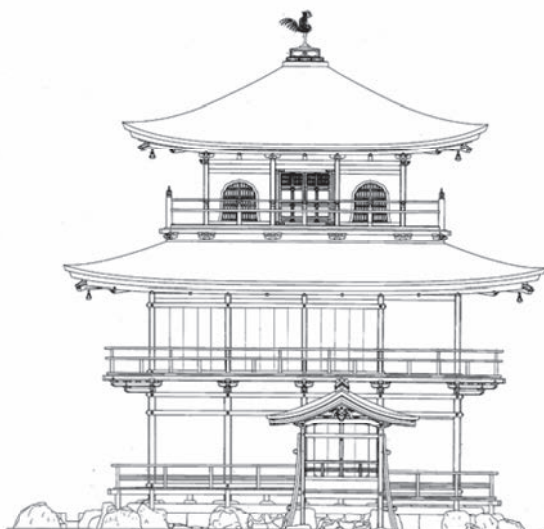
金閣平面図



南立面图



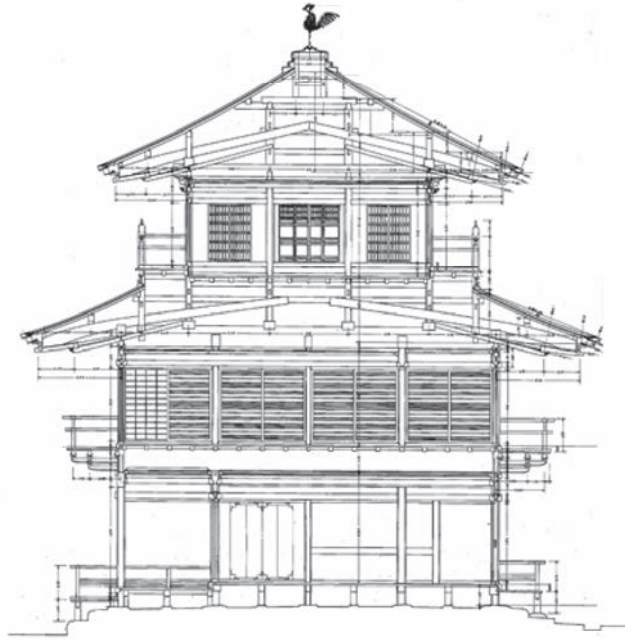
東立面图



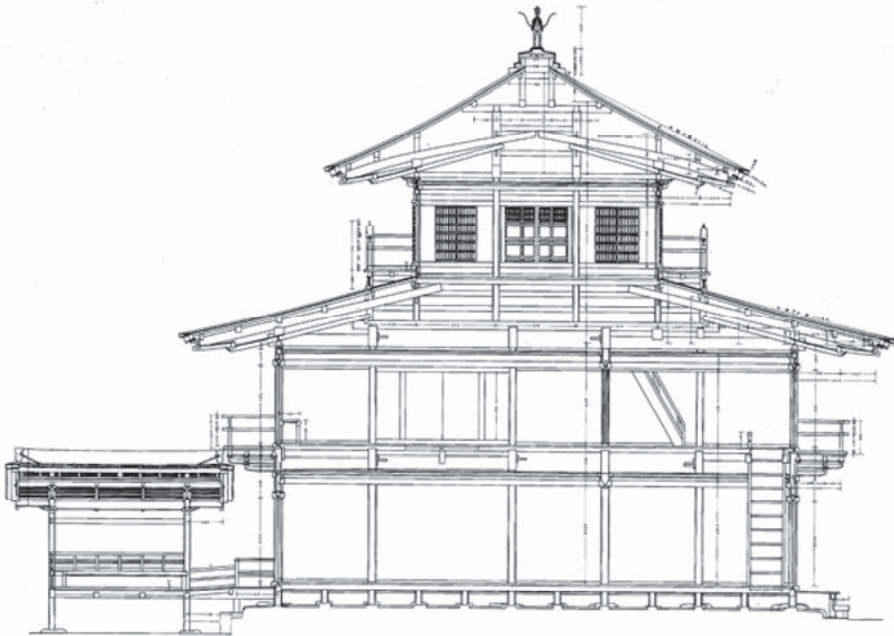
西立面图



金閣立面图



南北方向断面图



東西方向断面图



金閣断面图

瓦大工橘氏の瓦銘

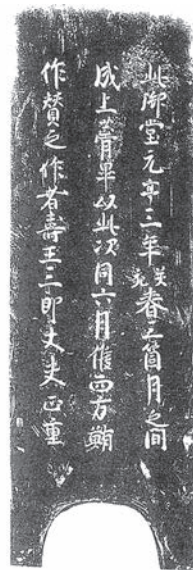
理事 中尾 正治

ここでいうところの橘氏は、建造物の屋根を覆う瓦の製作と葺き上げの技術を担った瓦工集団を形成し法隆寺、薬師寺、唐招提寺、靈山寺等の大和諸寺を始めとして、多くの瓦篋書銘を残し、そして後になって大和地方だけでなく播磨地方及び京にも足伸し寺院の屋根瓦に天平年間以降数代に亘って書銘を記している瓦工のことである。その瓦の書銘は鬼瓦や足元、鳥衾、獅子口に製作者自身の姓名から製作年月日、居住地、他に自分の幼名、年齢などを記し、軒丸、軒平瓦等にも屋根に葺かれるあらゆる種類の瓦に書き残している。

大和地方の橘氏

橘正重

瓦大工橘氏の中世における現存する史料の古例は、唐招提寺金堂の鴟尾に篋書で「此御堂元亨三年癸亥春三箇月之間成上葺畢以此次同六月候西方鮪作賛之作者寿王三郎大夫正重」と記されている。奈良時代の本格的な遺構として存在しているこの金堂の荘重たる屋根の主役になる東西鴟尾の内、現状の東側棟端に納められている復古の後補鴟尾を寿王三郎大夫正重が元亨三年(1322)に製作していたことになる。正重は、古今一陽集その他法隆寺関係史料から元弘二年(1332)法隆寺塔頭福圓院(旧蓮華院)地藏堂供養の「施主瓦大工三郎大夫」と見え同一人と思える。



橘国重

永徳三年(1383)になると法隆寺夢殿の修理棟札裏面に「瓦大工橘国重」以下九人の瓦工の名が記されている。国重は瓦大工を名乗り工人集団の階級的な臈次ではなく、瓦工の統率者であったと見られ、座のような形態を成した工事組織の技術上筆頭に相当する地位に就いていた。そして応永五年(1398)法隆寺西円堂修理棟札には「在家奉加衆」の一人として国重が見え、瓦葺衆として大工国重をはじめ権大工吉重ら五人の名が綴られ、この頃か

ら瓦造りと伴に瓦葺きを瓦工の生業としていたことが分かる。

国重の瓦銘は応永五年から六年後の応永十一年(1404)法隆寺五重塔三重東南隅鬼瓦に「ヲウエイ十一年キノエサルノトシ四月八日、タチハナノ国重(花押)、五十二ノトシ寿王(花押)」と記し、同塔三重東北隅・西北隅、四重東北隅鬼瓦にも同じような内容の篋書きをしている。国重はこの時期高齢であったので瓦工の指揮を任せられる後継者の指名も行っていたようであり、血縁者かどうか明らかでないが後継者の名前が記されている瓦銘が数多く見出されている。



橘吉重

応永十二年に法隆寺講堂北西隅棟鬼瓦に「コノトシワ大夫殿フクノハテナリ、大工ノトシワコノトキハ廿八ニナルナリ、瓦大工彦次郎」とあってこの文面から分かることは、国重は瓦大工を退いたとし、二十八才の彦次郎が瓦大工を名乗ったと読み取れる。ところで瓦大工彦次郎は、二十九才のとき法隆寺聖霊院鬼瓦に「吉重、瓦大工ヒコ次郎コノトシナヲカエテ寿王三郎トナヲツクナリ、ナノリハ吉重瓦大工ヒコ次郎トシ廿九」記していることから吉重が事実上瓦大工になり、寿王三郎を襲名したことが分かる。

吉重については、法隆寺をはじめ大和諸寺そしてまた京において瓦大工橘氏の作品の中でも最も多くの書銘を残した人物であり、その点橘氏の系譜において特に興味のそそる存在である。書銘は篋書が殆どでその内容から彼の年譜の一部を知ることが出来る。生年は永和四年(1379)であり、応永五年(1398)二十才に権大工であった。応永十二年(1405)は先代の国重が退任したかまたは身罷ったのか不明だが吉重は二十八才には瓦大工になっていた。実は前年の応永十一年には瓦大工に就任していた。永享十年(1438)の書銘から応永十一年の二十七才のときと知れ、そののち寿王三郎を襲名し、幼名が彦次郎であり、工事組織の長として職工達を統率していたことが窺える



書銘がある。また彼の籠書きは一癖ある表現に見て取れ、自己流であろう長文はカタカナ文であり、当て字で方言を混ぜて流暢に書き、さらに当時の民衆の話し言葉は発言通りに、戯れ歌に至るまで書き込み、これは吉重の筆跡だと一目で判読でき、瓦大工吉重の仕事ぶりや人柄を偲ばせるものがある。

先述したように、吉重は二十才のとき権大工、二十七才で瓦大工になり、幼名は彦次郎と称すとし、二十九才のとき寿王三郎（寿王大夫とも言った）に名を改めたと自己紹介している。五十九才から「ユウアマタフトユウ」と称するようになり、この頃は土打ち等仕事を伴にした仲間十名ほどを紹介した銘文が法隆寺南大門の軒平・軒丸瓦に刻まれている。

七十一才の長命を得た吉重も文安五年(1448)になると「子ンフツヲ申テクルヘシ」とか「ナムアマタフツ」など仏に寄り纏る弱音を吐き始めた。そしてこの時期を最後に彼の特徴とするカナ混じりの籠書きが見られなくなってくる。

二代橘吉重

文安五年から逆昇ること嘉吉元年(1442)、橿原市吉楽寺本堂の丸瓦銘に「瓦大工橘吉重寿王大和国飯高郷****」と漢字の楷書が使用された籠書がある。この書体は一見してカナ文のユウアミ吉重とは異筆別人と思われる。恐らくユウアミ吉重の後を継ぐ吉重であろうと年代から見て取れ、父子の関係だと推察される。ユウアミ吉重末年の文安五年の瓦銘「ユウアミユツルナリ」と記されていることから、次の吉重が瓦大工として出現した。

前の吉重は、その瓦銘中に仕事をした仲間の名が散見されている。法隆寺諸堂の銘文に寿王次郎、左衛門五郎などがあって次の瓦大工の名とも予見されるところで、前の吉重自身も左衛門次郎、彦次郎左エ門大夫の他に寿王太郎、寿王丸といった名を用いている。

ここで、前のユウアミ吉重を初代、次の吉重を二代として書き進めることとする。

初代吉重は「セイ大イノ彦次郎」と記し、二代吉重は「招提彦次郎」と名乗り、二代吉重の作品は、先代からの法隆寺に限らず大和諸寺や他の地方に対しさらに活躍の場を拡げている。橘氏一派の瓦工達は、播磨や京へ以前より況して進出していたが播磨での橘氏が「大和國西之京」と出所地の書銘を残していることから見て、瓦大工橘氏の本拠地は作例の多く残る法隆寺というより寧ろ西之京の唐招提寺であり、正重の唐招提寺金堂鴟尾銘を思い出させる。

三代橘吉重

次に、橘氏のその後の活躍は三代吉重の存在が確認できる。

大永四年(1514)法隆寺綱封蔵平瓦から、「大永四年甲申二月十二日ヨリハシムル舜清法

師也施主十宝院瓦大工ニシノキャウヨシシケ作也」と見える。二代吉重は瓦銘に年齢を記さないので正確な年譜を辿ることはできないが、嘉吉元年(1442)の二十七才には瓦大工職に就き、長享二年(1488)に寿王大夫と名乗り、この頃は七十才を越える高齢者になっていた。法隆寺綱封蔵瓦銘の大永四年頃までには瓦大工職の交代があったと考えられ、従ってこの頃に瓦大工を名乗っている人物は三代吉重であると見做すことができよう。因みに、初代吉重は二十代後半に瓦大工に就いている。

播磨・京の橘氏

瓦大工橘氏は、室町時代になって播磨や京へも出向き、大和だけに留まらず地方都市に拠点を持つ動きが活発になるがこのことは瓦工に限らず木工にも言えることであって、既に鎌倉時代後半から地方への進出が窺え、京の東福寺や尾道浄土寺、兵庫県下の諸寺に奈良工匠の名が文書や棟札に誌されていることから分かり、建築職工の地方への拡がりが見られる。

おわりに

瓦大工正重から三代吉重まで橘氏一派の造瓦と屋根葺きに関わる経過を瓦銘文で追うことによりその存在と活躍を読み取ることができたと思う。吉重以降の橘氏を名乗る後裔達は播磨に本拠を置くことになるが、移した後も誇らしげに大和西之京と明記し名乗りとした場合があったと推察される。しかし播磨での橘氏瓦銘は桃山時代以降になると見られなくなる。

本貫の地、大和において、慶長十一年、橘氏縁の瓦書銘が見られるが、それ以降見受けられなくなるが突如、元禄年間に「大工与次兵衛尉橘吉長」、「石見掾橘義永」、押型で瓦大工橘吉長とあり、更に江戸時代後期の寛政から享和に「石見掾忠恒」の名が出現してくる。これらの瓦工が由緒ある橘氏吉重の系譜なのかどうか確証はないが、少なくとも古代中世を通じての橘氏の書銘瓦が法隆寺等の大和諸寺の屋根にあるのを見て心を動かされ、誇り高さ瓦工の存在を知り、その影響から橘氏を名乗ったものかも知れない。

瓦師の研究は、造瓦および葺き方の技術、史的調査などが対象となる中で瓦師の存在が知れてくる。橘氏の場合、古代中世から近世に及ぶ系譜を辿ることが瓦銘など史料により可能になった。

16世紀末から17世紀初期になると城郭、大寺院の造修築が戦国からの復興と為政者の権威誇示などの理由から畿内を中心に行われるようになり、京では伏見築城、聚楽第造営、大仏殿建造などから深草と大仏瓦の繁栄する弾みとなった。また、寛永期以降には江戸・京を主に幕府の施策により各所寺院の造営、改修が相次いだ。そして50年後の元禄年間には

国内の経済が豊かで安定したこともあって各地の寺院の再建が行われたことにより瓦の需要が高まり、間もなく瓦葺の奨励期を向かえことになり、そのような中で瓦工達が代々継承されていく例が見られようになる。

大仏瓦師の流れを汲む福田加賀守一派は大徳寺、妙心寺などの瓦を近世初頭から江戸中頃まで数代に亘って統率者が脈々と継承されている。私的調査の範囲内であるが、南山城地域においても宇治の山田源左衛門、木津の三上源右衛門は明治時代まで続いていたことが分かっている。

ここで、紙面の都合により記述を終えるが、内容は充実したものでない。取り敢えず大和地方を主とした橘氏の足取りを記述した。橘氏の業績は播磨、京都方面にも数多くの瓦銘が見出され、関係する史料も蓄積されている。別の機会があるようなら、続記することには躊躇いはないつもりである。併せて橘氏の瓦銘から年譜を羅列的になるが表組にすることも思っている。

以上

参考文献

- 『考古学雑誌』第六巻第六号「瓦大工寿王彦次郎橘吉重」天沼俊一著 大正5年2月5日
- 『校刊美術史料』第八八号～九一号「古建築銘文集」(一)～(六)伊藤延男蒐集 昭和37年7月～12月
- 『日本建築史図録』室町 天沼俊一著
- 『大和地方の在銘瓦集』高橋美久二著 昭和50年
- 『史迹と美術』第三十二ノ十「播磨の瓦大工・橘氏」田村信成著 昭和37年12月1日
- 『若文』第七号拙稿「山城国在銘瓦銘文集」 昭和50年5月31日
- 『京都考古』第69号拙稿「八幡近郊と南山城地域で名を残した瓦師」1993年3月20日



「琉球建築」史話

理事長 高橋 康夫

はじめに

沖縄県はかつて東アジアの一つの国、琉球王国でした。その琉球王国の建築と都市の歴史や魅力を、わかりやすく伝えたいと考えています。

対象とする時代は、琉球王国が存続した15世紀から19世紀中頃までの時代、いいかえると、古琉球と近世琉球の時代にあたります。一方、対象とする地域は、いうまでもなく琉球王国の版図（奄美諸島・沖縄諸島・宮古列島・八重山列島）ですが、「都市」も主題とすることから、おのずと中核をなす地域であった沖縄本島にフォーカスすることになります。

琉球王国の主要都市である首都首里と海港那覇を中心に、いくつかの都市や集落、また主要な建築類型（住まい・宮殿、宗教建築など）、琉球の歴史と文化を象徴するグスクを取りあげます。さらに伝統的建造物群・文化的景観・名勝・史跡などの文化財についても視野に入れるつもりです。

それらを、東アジアやさらに広くユーラシ

アのなかでとらえること、また琉球の風土・地域・生活・生業、歴史まちづくりなどの視点から眺めることなどによって説明しようと考えています。

ところで、“琉球建築”に取り組もうとするとき、根本的な難題が横たわっています。それは、沖縄戦による甚大な被害のため、建築遺構はもちろん、文献史料などもきわめて少ないことです。当然の結果として宮殿・邸宅・民家や寺院・神社などの個別研究の蓄積が乏しいという、大きく高い壁が存在しているのです。

こうしたこえがたい限界があること、沖縄に住んだ経験がないので琉球・沖縄文化の体感に乏しいことを自覚しながら、“琉球建築”に向き合おうと思っています。近年の琉球史研究、とくに歴史学と考古学の目をみはるような進展によって、都市と建築の歴史にも光が射しこむようになってきたからです。多くの先学による学的蓄積があるので、まったく成功の見込みのない無謀な試みをするわけではないと信じています。

第1話

わたした島、ウチナー ～世界から琉球へ、沖縄から世界へ

‘わたした’は私たち、‘ウチナー’は沖縄なので、‘わたした島、ウチナー’は、私たちの島の沖縄ということです。しかし島は、まわりを水で囲まれた陸地、庭園、集落・村落など、いくつもの意味をもっていますし、さらに日本でただ一つ、島々だけからなる沖縄県・琉球では‘くに’や‘ふるさと’も、意味しています。つまり、‘わたした島、ウチナー’とは、私たちの島であり、‘くに’であり、‘ふるさと’である沖縄、ということなのでしょう。この独自の歴史と文化をもつ‘島’、沖縄・琉球の歴史をかんとんにお話しします。

一 ユーラシアのなかの琉球

激動の東アジア世界

14世紀後半の東アジアは動乱の時代といえるでしょう。1368年、中国では元を滅ぼした朱元璋^{しゅげんしやう}が明王朝を創建し、1392年、日本では足利義満が南北両朝を合併して統一を果たし、翌1393年、朝鮮半島では李成桂^{りせいけい}が朝鮮を建国しました。

ところで、元の末期、国内外の治安が悪くなったため、日本と中国の往来はそれまでの日本・博多と元・寧波（明州）を直行する航路（大洋路）に代わって、琉球を経由する南島路（肥後高瀬－薩摩－琉球－福建）が利用されることになりました。

この新たな状況のなかで、琉球の情報も明にもたらされたのでしょう。1372年、明の太祖（洪武帝）は楊載を派遣して「琉球国」を帰順させようとしています。中山王察度はこれをうけて、初めて明へ進貢しました（朝貢貿易の始まりで、1874年まで続きます）。1383年には洪武帝は「琉球国中山王」の察度に鍍金銀印を下賜します。その後の1385年、琉球国の山南王と山北王にも鍍金銀印を下賜しました。これにより琉球国は、三山に分裂したままで明の冊封体制下に入りました。

明朝は、1383年には琉球の三山の抗争を知り、和平を命じていたのですが、三山の統一が実現したのは、40年ほど後の1422年のことでした。尚巴志^{しやうはし}が中山王・山北王・山南王を打倒したことにより、ここに名実ともに琉球国が樹立されたのです。1407年、明の第2代永楽帝の冊封使が琉球に渡来し、尚巴志の父尚思紹を「琉球国中山王」に冊封しました（第一尚氏王統）。

永楽帝は、1402年に室町幕第3代府将軍足利義満を「日本国王」に、1403年に李氏朝鮮の第3代太宗を「朝鮮国王」に冊封しています。こうして東アジアの国々は明の国際秩序のなかに組み込まれたのです。

ひと・モノ・情報の伝来と受容

15世紀には、琉球の海上貿易は東南アジアに広がりました。沖縄の特産である泡盛（米焼酎）は、シャム（現在のタイ）との交易にともなって蒸留技術が伝えられたといえます。ちなみに2016年には世界遺産の勝連城跡の14～15世紀の地層から3～4世紀のローマ帝国のコイン（銅貨）4枚が出土したことが報道されました。これらのコインが琉球に持ちこまれた経緯や使い方などはわかっていませんが、琉球がユーラシア交易圏の一環、中継地であったことを物語るものでしょう。

第一尚王統が拠点とした首里城の正殿には、有名な万国津梁の鐘（1458）が掛けられていました。その銘には、琉球国は南海の勝れた地、蓬莱の島である、船が万国の架け橋となり、海上交易のおかげで国中に異産至宝が充満している、また三韓（朝鮮）の「秀」を集め、明は「輔車」（ほお骨と下あごの骨）、日本は「唇齒」にあたる、とあります。琉球国王が自分の国を、また周囲の国々との関係をどのように意識していたかがよくわかります。



首里城正殿に架けられた万国津梁の鐘（複製）

国王の代替わりに明朝が派遣した冊封使、そして朝貢貿易によって、琉球に膨大な文物がもたらされたことはいうまでもありません。また琉球の仏教史に名を残した二人の禅僧——日本で禅を学んだ琉球の溪隠安潜と、日本から琉球に渡って多くの禅寺を建立した芥隠承瑠——は、日本・琉球の交流の明証でしょう。1455年に朝鮮国王から方冊蔵経（大蔵経）

を贈られ、これによって天界禅寺を建立したことは、朝鮮の「秀」を集めたことを示すものといえるでしょう。

尚巴志の第一尚王統は首都首里や海港那覇の大造営をおこないますが、わずか数十年で滅ぼされ、1470年に尚円しょうえんが即位して第二尚王統（～1879年）が始まりました。冊封・朝貢体制とともに首里と首里城、また那覇港を引き継いだこの王統は、尚円の後を継いだ尚真（在位1477～1526）の時代に、東アジア・東南アジア交易の最盛期を迎え、独自の琉球文化を創りだしていきます。

とくに建築文化を示す遺構として、世界遺産・国宝の王陵、玉御殿（1501）や世界遺産・重要文化財の園比屋武御嶽石門（1519、拝所）、重要文化財の旧円覚寺放生橋（1498）、天女橋（1502）、旧崇元寺第一門及び石牆（1527以前）があります。

16世紀——激変する東アジア

さて、尚真の死去、尚清（在位1527～1555）の即位のころから東シナ海をめぐる情勢は混迷を深めます。明をしないで弱体化させたのは、北方でくり返されるモンゴル人の侵入、そして南方で生じた倭寇の活動でした。1522年（明の嘉靖元年）から約40年ほど続きます（嘉靖大倭寇）。倭寇といっても、中国人が大半で、日本人は3割ほどだったようです。

倭寇は琉球にも影響を及ぼし、尚清は首里城の城壁を築き、また那覇港を防御するために三重グスクと屋良座森グスクを構築しています。

東アジアの海域には中国と日本のほか、ヨーロッパからポルトガルも進出するようになり、琉球の海上交易は衰えていきました。

東アジアは16世紀もまた激動の時代となりました。世情不安は明だけではありません。戦国時代の日本では室町幕府の弱体化が進み、16世紀半ばから下剋上と戦乱が激しくなります。朝鮮半島でも李朝の動揺が続きます。新旧勢力の交替と社会体制の変革の時代、つまり近世の胎動期であったといえるでしょう。

二 日本と明・清のあいだで

島津侵略（1609）

日本と明、李朝、琉球それぞれの政情・社会経済の不安がたかまり、さらに四国間の関係が変動し、そのひずみが琉球に集中しました。

とくに、天下統一を果たした豊臣秀吉は1591年、日本・朝鮮・中国を領土とする構想のもと、明を攻めるために全国の大名に朝鮮出兵を命令しました。日本と明・李朝とあいだに戦争が勃発します（文禄・慶長の役）。このとき秀吉が求めた援軍の派遣を拒んだことなどから、日琉関係に暗雲が立ち込めました。

江戸時代となった1609年、薩摩の島津家久は徳川家康の了解のもと、3000の兵を送って琉球を攻略、征服しました（島津侵入）。琉球は、薩摩の支配を介して幕藩体制に組み込まれることになりました。なお、奄美諸島は薩摩藩の直轄支配下におかれました。

日本との関係は、かつての「唇齒」から琉球の自立・自由を束縛する「軛くびき」に変質しましたが、その一方で江戸幕府の思惑もあって琉球王国は存続することになり、明そして清（1644年、北京遷都）との冊封・朝貢関係も維持されました。

こうして近世琉球は日本と中国の双方に帰属し、日本と清のはざまに生きることになりました。江戸幕府將軍の代替わりごとに慶賀使の江戸上り、また琉球国王の代替わりごとに謝恩使の江戸上りと清の冊封使の来琉があり、いずれも文化交流に大きな役割を果たしました。

文化の興隆

その後の琉球は、日本と清からそれぞれの文化を積極的に摂取しつつ、そのために琉球の中国化——風水思想、儒教、漢詩文、清明祭、亀甲墓などの受容——、そして「大和」化——住まいの様式（床の間・竿縁天井・畳）、立花、茶道、浄土宗と盆踊りなどの受容——

が進みます。

しかしながら、国際関係と国内統治が安定し持続したことから、18世紀には琉球独自の文化もめざましい発展をとげます。こうして「琉球王国の黄金時代（ルネッサンス）」とも呼ばれる時代が到来しました。

琉球王国の史書『中山世譜』(1701)・『球陽』(1745)、そして地誌『琉球国由来記』(1713)・『琉球国旧記』(1731)が編纂されています。また組踊り（歌舞劇）が創作され、芭蕉布の絣などの琉球織物、堆錦の琉球漆器などの美術工芸が発展しました。泡盛の量産も、この時代のできごとです。

琉球王国の衰退

薩摩藩と琉球王府が課した重い税負担は、18世紀後半からシマ（村）をしいに疲弊させ、19世紀には税負担能力を失った村々が続出しました。王府財政の窮迫という重大な危機にさらに追い打ちをかけたのが、1816年のイギリスをはじめとして、フランス、オランダ、アメリカ、ロシアなど列強の軍艦や艦隊が来航し、開港と通商を要求したことです。軍事組織をもたない琉球は、1854年にアメリカ、翌年にフランス、1859年にオランダと、あいついで修好条約を締結するほかありませんでした。

こうして琉球王国は、日本そして世界に押し寄せる近代化の激流に呑み込まれていきます。明治新政府は、1872年に琉球藩を設置し、さらに1879年には琉球藩の廃止と沖縄県の設置を強行します（琉球処分）。15世紀初めからおおよそ450年にわたって独自の文化を築いた琉球王国はここに滅亡しました。

三 沖縄から世界へ

1899年のハワイ（オアフ島）への移民が沖縄県の本格的な移民のはじまりです。海外移民は、極度の貧困と過剰人口を解消するやむをえない方策でした。移民の人々が稼いだお金を故郷へ送金したことによって、県の経済

も支えられたといます。

その後、北米・南米など世界に広がった海外移民は、人々の心に深く根ざしていた琉球の伝統的な生活文化を、世界各地の小さなオキナワに移植し、育みましました。シマ唄・三線・カチャーシーや郷土の食文化、親睦と資金融通の「模合」（頼母子講）などは、オキナワ移民社会の基盤となりました。

今、沖縄からの移民の子孫が世界中におおよそ42万人いるといわれています。沖縄県の人口が143万人（2020年調査）なので、ウチナーンチュ（沖縄人）が185万人ほどいることになります。

5年に一度の祭典「世界のウチナーンチュ大会」にも海外から多くのウチナーンチュが参加しています。第1回（1990年）が19の国から約2,400人、第6回（2016年）には29の国・地域から約7,400人と、回を重ねるごとに増え続けています。沖縄を、その歴史と文化をアイデンティティとする人々にとって、ウチナーネットワークの発展、持続が大切であるからでしょう。それは、現代の、そして未来の「万国の津梁」のようです。

これまで周辺諸国との関係から琉球・沖縄の移り変わりを述べてきました。これは、大きく古琉球と近世琉球、近代日本（沖縄を含む）に分けて、琉球史をざっと眺めたということでもあります。

古琉球と近世琉球は、それぞれおおよそ日本の中世と近世にあたります。琉球史では古琉球の時代をさらに細分して、グスク時代、三山時代、第一尚氏時代、第二尚氏（前期）時代としています。また琉球王国時代というと、第一尚氏・第二尚氏時代、あるいは15世紀初期から19世紀後期にいたる琉球王朝の時代のことです。

琉球史と日本史の時代区分

日本		琉球		備考	
原始	旧石器時代	先史時代	旧石器時代	14000年前 日本：仏教伝来大陸文化の受容	
	縄文時代		貝塚時代		
	弥生時代				
	古墳時代				
古代	飛鳥時代 592～		古琉球		グスク時代
	奈良時代 710～				
中世	平安時代 794～	琉球王国時代	第一尚氏 第二尚氏 前期	1420頃 琉球統一 首里を首都 那覇大造宮 1470 1498 円覚寺 1501 玉御殿 1519 園比屋武御嶽石門 1527 崇元寺	
	鎌倉時代				第二尚氏 後期
	南北朝時代				
	室町時代				1609 薩摩侵略 1644 清、明を滅ぼし中国を統治
	戦国時代				
近世	安土桃山時代	近世琉球			
近・現代				1879 琉球処分・沖縄県 1945 沖縄戦 1972 沖縄返還	

第2話

青い島、青い森 ～沖縄のエコトープ

第二話では、沖縄の青い空と青い海、そして青い島と青い森、つまり沖縄の風土や国土、その地形・地質・植生、また生活・信仰とのかかわりについて、説明しましょう。

一 青い空、青い海

沖縄といえば、青い空と青い海。あまりにも広大な空と海の境界に、小さな青いシマが点在します。シマの青は、もちろんブルーではなく、グリーン（緑）です。青島や青森の青、交通信号の青と同じです。青いシマ（国

土）の高く盛りあがった地形、山・丘・森は、いずれもムイ（森）と呼ばれます（『沖縄大百科事典』）。ちなみに東北地方でも、森は丘を意味します（『広辞苑』）。

青いムイは、シマと同じように、青々とした木々の緑です。宮崎市南部の小島、青島は亜熱帯性植物のピロウ（沖縄ではクバ、コバ）

の自然林でおおわれています（特別天然記念物）。沖縄でも、代表的な聖地である久高島の北部に神木クバが繁茂しています（県指定天然記念物）。

沖縄県の気候は、広大な太平洋と東シナ海に囲まれ、熱帯と温帯のあいだにあり、季節風（モンスーン）が夏は南西から冬は北東から吹くことから、「海洋性亜熱帯季節風気候」といわれています。沖縄の特色となっている青い空（清浄な大気）をはじめ、寒暖の差が少なく暮らしやすいこと、高温・多湿であること、夏の日射しは酷烈といいたくなるほどなのに、海風のおかげで猛暑日にはほとんどならないこと（那覇市ではこの5年間2日のみ）、夏にはしばしば猛烈な台風に襲われることなどは、こうした気候条件に由来します。

夏・冬の季節風は、琉球さらには東アジアの海上交易を支えた大きな条件でもありました。

このような気候と沖縄の人々の心が結びついて、上る太陽の霊力を崇める信仰が生まれ、そして青い空とオボツ・カグラ（天神、その居所である天上）、青い海とニライ・カナイ（海神、海のかなたにある神々の世界）など、人間界とは異なる他界があるという観念が生まれたのでしょうか。

那覇と京都の気温比較（2020年）

	猛暑日	真夏日	熱帯夜
那覇市	0日	108日	108日
京都市	26日	19日	39日

真夏日：最高気温30℃以上の日

猛暑日：最高気温35℃以上の日

熱帯夜：最低気温25℃以上の日

● 二 青い島、青い森

九州と台湾そして太平洋と東シナ海のあいだを弓状に延びているのが、琉球弧（琉球諸島）です。北の奄美諸島と中央の沖縄諸島（沖縄島など）と南の先島諸島（宮古諸島・八重山諸島など）からなっています。

北東から南西に延びる細長い沖縄島の地形・地質は、もともと幅の狭い石川地峡を境界として大きく二つに分かれます。北部は、「山原^{ヤンバル}」とよばれるように山岳の多い高島の地形で、島状に続く山地の周囲に平らな台地（海岸段丘）が広がり、沿岸の低地には集落がつくられました。

スタジイなどの常緑広葉樹の自然林が広がり、ヤンバルクイナ（天然記念物）が息する沖縄島北部は、2021年7月、奄美大島・徳之島・西表島とともに、世界自然遺産リストへの登録が決まりました。

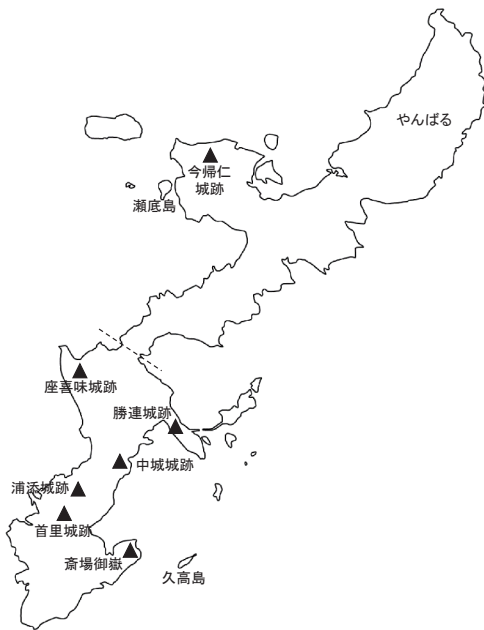
一方、中南部には山地がなく、低島の地形で、高さ200メートル以下の台地・丘陵地です。中南部にはガジュマルやフクギ、ピロウなどが繁茂しています。

この地域の琉球石灰岩台地では崖下などに地下水が湧きだします。こうしたところに集落が発達しました。湧泉などをカー（井戸）と呼び、湧泉に樋をかけたのがヒージャー（樋川）です。

カーやヒージャーには水汲みや洗濯などのための共用施設がつけられ、住民の社交の場ともなりました。首里の龍樋^{チュンナガ}や喜友名泉（重要文化財、1751-1829）、仲村渠樋川^{ナカノカカリヒージャー}（重要文化財、1912）、垣花樋川（南城市）などが有名です。

沖縄島の海岸にもサンゴ礁が発達して、独特の青い海、白い浜となっていますが、これも亜熱帯気候の特性の一つです。島とサンゴ礁のあいだに形成された浅い内海（礁湖）——沖縄ではイノー（礁池）と呼ばれています——は、ウラ（浦）の人々の漁場そして貝藻の採集場として大切な生活基盤となっていました。

ところで、沖縄では台地・丘陵の小高いところは岳・嶽・森などと呼ばれていますが、沖縄の人々は、この山（丘）や森、また巖・水などを信仰の対象としています。御嶽^{ウタキ}（聖域）も、青い森の小高い丘にあることが多いのです。



沖縄本島

身近なところの木々をみると、屋敷林にフクギ、生垣にハイビスカスやブーゲンビリア、並木にフクギやガジュマル、リュウキュウマツ、村を守護する御嶽の奥にクバ（ピロウ）

のムイがみられます。クバは神が降臨する木と考えられています。久高島の北部はクバの群落に広くおおわれています（県指定天然記念物）。琉球王権と深くかかわる聖地の「久高コハウ森（久高のフボー御嶽）」（名勝）や、今帰仁村の「こはおの御嶽」（名勝）などのクバの御嶽は、「聖地としての風致」を伝えています。

さて、沖縄県の県庁所在地である那覇市は、琉球王国時代に首都であった首里と、その外港として栄えた那覇を含んでいます。実は、前近代の琉球に存在した都市は、この首里と那覇、二つだけだったのです。

那覇の地名は漁場を意味する「ナファ」に由来するといわれますが、それが示唆するように那覇の原点は、サンゴ礁の海に浮かぶ島でした。一方、首里（シュリ、スイ）は、地名の由来についてはよくわかりませんが、立地しているのは琉球石灰岩の丘陵です。

首里と那覇の原風景は、それぞれ丘とグスク、島とウラであり、〈青い空・青い森〉と〈青い海・青い島〉という鮮やかな、しかも典型的な対比を示しています。

第3話

赤瓦・シーサー・ヒンプン ～〈伝統〉の残照

沖縄戦による激甚というべき戦災から復興を遂げ、また都市や農村、リゾートの大開発が進行するなかで沖縄は大きく姿を変えてきました。とはいえ、各地に伝統的な民家や集落が今も生きつづけていて、豊かな魅力を伝えています。

一 〈沖縄らしい〉景観

沖縄の風景

真っ白な道や苔むした石畳の道に沿い、サンゴの石垣やフクギの屋敷林に囲まれて、家々がひっそりとたたずんでいます。

青い空と赤い瓦と白い漆喰の屋根。コントラストが鮮やかです。屋根に置かれたシーサー

（獅子）は、門とウフヤ（主屋）のあいだに設けられたヒンプンとともに、災厄からヤー（家）を護っています。また、ウフヤの深いアマハジ（雨端、軒庇）は、強い日射しや激しい風雨を遮ってくれます。

敷地にはウフヤのほか、トングワ（台所）やアサギ（離れ座敷）などが、棟を別にして立っています。いわゆる別棟型（分棟型）の



竹富島の民家景観



玉御殿のシーサー

構成もまた、琉球諸島の基本的な特色です。

このような魅力的な民家や集落、それらが醸し出す雰囲気・情趣、異国情緒こそが、〈沖縄らしさ〉なのでしょう。沖縄・琉球独自の自然と歴史と文化に育まれた琉球建築文化の精華ともいえるでしょう。

沖縄らしい民家や集落の特徴をかんたんにみておきましょう。

赤瓦

沖縄の瓦の歴史は、古琉球の時代にまでさかのぼります。朝鮮半島の瓦とかかわる「高麗系瓦」や日本本土の瓦技術を用いた「大和系瓦」が、浦添グスクや勝連グスク、首里グスクなどいくつかのグスクで使われました。首里グスクの正殿では灰色・褐色の瓦が葺かれていたようです。瓦葺はきわめて例外的であり、ほとんどの建築は茅葺や板葺でした。

近世になると、1670年の首里城正殿再建にあたって板葺から瓦葺に変わり、灰色・褐色・小豆色の瓦が混在して使われています。その

後、少しずつ仏堂や王族などの御殿や殿内などにも瓦葺が用いられるようになりました。ただ、瓦は風雨や火災に強い屋根材なので琉球諸島には適しているのですが、高価なことと身分による制限があったことから、首里や那覇でも普及するにはいたりませんでした。

18世紀前半には赤色の瓦が製造されています。1712年の首里城正殿再建のときには赤瓦も葺かれましたが、ほかに灰色・褐色・小豆色の瓦が混在、使用されていました。

瓦葺が広く普及するのは、近世身分制度とそれにとまらぬ建築制限が廃止された近代、1889年からのことです。赤瓦と白漆喰の民家、集落景観の出現は、どちらかといえば近年のことであり、すぐれた機能に加えて、ステイタスシンボルでもあったからなのでしょう。

戦災消失した首里城正殿は、1992年に復元されましたが、その屋根は伝統のシンボル、赤瓦によって葺かれていました。

シーサー

19世紀末から瓦葺が普及するにともない、瓦屋根にシーサー（獅子像）を置くことも広まりました。火伏や悪霊返しなど、魔除けのためです。

獅子像を魔除けや守護神としたのは古代オリエントですが、中国には紀元前2世紀ころに伝わり、琉球に入ったのは明との交流が始まった14世紀後半以降でしょう。15世紀、尚真王の代に首里城歓会門に据えたのが始まりとされています。玉御殿の屋根や巖頭には3



赤瓦とシーサー

体の石獅子が置かれています。王城や王陵の獅子像は魔除けや守護神であるとともに王権の象徴でもあったのでしょう。

獅子像は城門や陵墓、寺院、御殿、村落、御嶽などにも据えられるようになりました。那覇市の中心街である国際通りは、もともとは湿地や畠が広がる郊外の道でしたが、1950年代後半から急速に発展し、「奇跡の1マイル」とよばれました。国際通りの両端にはそれぞれ2体のシーサーが置かれ、通りを守っています。

ヒンプン

ヒンプン（屏風）とは、目隠しや魔除けのために出入り口とウフヤ（主屋）のあいだに設けられた屏風、というよりも衝立のような壁・塀・垣のことです。形状も材料もさまざま、一枚岩、琉球石灰岩・サンゴ・瓦の石垣、板垣、竹垣などが用いられています。門のない民家にとっては、道と内部のあいだにバッファゾーンをつくりだす伝統的な手法として、とりわけ興味深いものです。

地域を悪霊から防ぐヒンプンとして、道の真ん中に立つ巨木、「名護のひんぷんガジュマル」（国指定天然記念物）が有名です。



中村家住宅の石垣とフクギ、ヒンプン

ちなみに中国では屏・照壁・影壁・照牆・牆壁などとよばれ、多くは磚や土で築かれました。およそ3000年前、西周初期の宗廟につくられたものが最古とされています。

屋敷囲い——石垣（石牆）・屋敷林

都市や集落、住居、城塞、墓、宗教施設、聖地などを石で囲うことは、古くから世界的に見られます。琉球・沖縄も、石囲いを多用する地域の一つです。うるま市の仲原遺跡の堅穴住居址では、拳大から人頭大の石灰岩塊で堅穴の縁どりをしていますが、この石組みも石垣の一つでしょう。この遺跡は「沖縄編年中期（高宮編年前第V期）」、本土の「縄文晩期」（紀元前1000～300年）とされています。ちなみにグスクということばの核心にあるのは「石囲い」ですが、広く聖域や集落、城塞・城郭を意味するようになりました。

16世紀には、首里の「富家・貴族」が周囲に石を積みかさねて牆をつくり、家を衝っていたという記録が残されています。琉球国王の宮殿、また死後の宮殿ともいえる玉御殿(国宝)は、琉球石灰岩の高い石牆で囲まれています。この時代の石造建築文化の粋ともいえるでしょう。

近世琉球では、瓦葺と同じように、石垣で家を囲うことも身分による建築制限の対象に含まれていました。そのため屋敷の石垣も、近代になってから広く普及しました。

首里や那覇ではステイタスを誇った石垣ですが、地方や離島では海からサンゴを切り出して積み重ねるなど、風土にふさわしい美しい石垣をつくっていました。

ところで、地方はもちろん首里や那覇においても、多くは樹木を植え並べた生垣でした。17世紀おわりころの首里城下の崎山では細い竹を植えて牆にしていました。すきまなく茂った葉と細い枝で、高さは一丈（3m）をこえず、削ったように平らでまっすぐに剪定されていたといえます。村々でも同じであり、広く清潔な道に沿って細葉の小竹を編んで生垣とし、葉を剪ってそろえ、方形に整え、目をこまかく密にしていた、と記されています。なお、竹のほか、黄楊（ツゲ）や「十里香」（椿）なども植えられていました。

屋敷囲いの一つとして、防風・防火機能と美観を備えた屋敷林があります。今もよくみ

ることができるのは、フクギを植え並べた屋敷林でしょう。中村家住宅（重要文化財）では三方を琉球石灰岩の石垣で囲み、その内側にフクギを植え並べています。また、屋敷林が美しい集落景観をつくりあげているのは、「なきじんそんいまどまり今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」（重要文化的景観）が代表的といえるでしょう。緑豊かなフクギ屋敷林が風から村と浜を守っています。

民家と集落

沖縄前近代の民家は、現代そして近代とは大きく異なる姿をしていました。赤瓦やシーサー、石垣、ヒンプンなどは、明治時代になってようやく民家に普及したのです。しかし、戦災と戦後復興、また住宅建築の鉄筋コンクリート化によって赤瓦屋根の多くが失われていきましたが、本島各地、また首里でも、まだ赤瓦の伝統民家をみることができます。

沖縄の美しい集落景観を伝える代表的なところというと、重要伝統的建造物群保存地区に選定された竹富島や渡名喜島でしょう。ともに白砂の道にそってテーブルサンゴや琉球石灰岩などを使った石垣、屋敷林のフクギ並木に囲まれた屋敷がならび、道路面より低く掘り下げられた敷地に、赤瓦・白漆喰の屋根が美しい伝統的な民家が立っています。



宮良殿内の石垣と道より低い敷地

渡名喜島で最初に瓦葺の家が建てられたのは1892年で、その後10年ほどのあいだに茅葺から瓦葺の屋根になったといえます。一方、竹富島ではわずかながら茅葺の寄棟屋根もみ

られます。

今もこうした伝統景観は沖縄各地に息づいています。これらはときに「沖縄の原風景」といわれますが、むしろ沖縄近代が創出した〈伝統景観〉のクライマックス、あるいはその残照というべきものでしょう。いずれにしても、亜熱帯の風土のなかで、沖縄の人々の生活と生業がつくりあげた魅力的な景観であることはいうまでもありません。

二 沖縄の文化財

ウチナンチュの宝

沖縄（ウチナー）は沖縄島のことですから、ウチナンチュも沖縄本島人をいうのでしょうか、今や、広く沖縄県人、さらに広く世界各地の沖縄県系人と理解したほうがよいようです。

そのウチナンチュにとって大切な価値のある文化遺産を、沖縄文化遺産と呼ぶことができるでしょう。それは、指定・未指定にかかわらず、ウチナンチュの生活、歴史と文化の理解のために欠くことができない有形、無形のものすべて、です。沖縄とその文化遺産は、世界各地に広がったウチナンチュの‘こころ’のよりどころといえるのではないのでしょうか。

ここでは国指定の重要文化財建造物を中心に、沖縄文化遺産の一角を概観することにしましょう。

沖縄最古の建造物

古琉球から近世琉球のすぐれた建築、戦前の旧国宝建造物は、沖縄戦により被災し、多くが消滅してしまいました。しかし幸いにも、いくつかの古琉球時代の石造建造物が生き延びることができました。首里とその近辺に立地することを思えば、奇跡的といえるでしょう。

いずれも第二尚王統の第3代尚真王（在位1477～1526）の時代、古琉球の最盛期ともいわれる時代の建立です。年代順に列挙します

と、旧円覚寺放生橋（1498）をはじめとして、玉御殿（1501）、天女橋（1502）、園比屋武御嶽石門（1519）、旧崇元寺第一門及び石牆（1527以前）などです。

沖縄県現存最古の建造物である旧円覚寺放生橋は、尚真王が創建した王家の菩提寺円覚寺にあります。円覚寺の開山に迎えられた芥隠承琥は京都・南禅寺にゆかりのある日本の禅僧です。円覚寺の前に掘られた円鑑池の中之島には、朝鮮国王から贈られた方冊藏経を納める経蔵がありました。その中之島に架けられたのが天女橋です。放生橋は桁橋、天女橋はアーチ橋ですが、ともにすぐれた意匠をもつ石造の橋です。



旧円覚寺総門と放生池、放生橋



天女橋と弁財天堂・円鑑池

玉陵は、尚真王が造営した琉球最大規模の王家の墓です。玉陵は玉御殿（たまうどうん）の漢訳ですので、本来の正しい表記であり、しかも本質的な意味を表現する「玉御殿」を使うべきだと考えています。以下では玉御殿と表記することにします。

玉御殿は、首里グスクの外、守礼門前の綾門大道あやじょうに面して南側にあり、琉球石灰岩の丘陵上、北側斜面の岩壁に拠って造られました。



玉御殿

高い石牆に囲まれて堂々とした石造墓室は、東室・中室・西室からなっています。琉球の葬墓制の伝統を承け継ぐ崖葬墓、堀込墓室として築かれていますが、宮殿（当時の首里城正殿）の様式をもとにした最初の、かつ最大の石造建築墓です（沖縄ではこの形式の墓を「破風墓」とよんでいます）。1924年に沖縄の歴史的建造物を調査した伊東忠太は、玉御殿を「嵩高偉大なる建築」と高く評価しました。

画期的なこの形式と、1768年からそこで営まれた清明節せいめいせつの祖先祭祀は、琉球・沖縄の人々の墓の建築とその祭祀、清明祭しーミーに大きな影響を与えました。玉御殿は琉球・沖縄の葬墓制の歴史において革新的また規範的な存在なのです。

さらに玉御殿はたんなる陵墓と片付けられない特性をもっています。王家の祖先神（祖霊神）や神となった歴代の王を祀る神殿とも、また御嶽や聖域グスクとも考えられます。玉御殿は琉球固有の信仰にもとづく唯一無二の



玉御殿（東室）

神殿建築といわなければならないのかもしれませんが。

園比屋武御嶽石門は、一間平唐門の形式をもち、左右に短い石牆がついています。サンゴ石灰岩を用い、日本と中国の木造建築様式に則して造形しています。木製の扉を備えています。出入り口としての機能はなく、石門の背後に広がる森、すなわち園比屋武御嶽を拝する場所でした。国王や聞得大君（最高位の神女）が道中の安全を祈願しました。今は、門自体が拝所になっているそうです。



園比屋武御嶽石門

崇元寺は尚真王の父、尚円王が創建した琉球歴代王朝の宗廟（国廟）です。その第一門（15世紀末～1527年以前）は、石造三連アーチ門の左右に石牆を組み合わせた独自の形式をっています。



旧崇元寺第一門及び石牆（内側から）

ところで、木造建築では、近世琉球の18世紀中頃以降のものしか残されていません。久

米島の上江洲家住宅（1754頃）、石垣島の旧宮良殿内（1751-1829）と権現堂神殿・拝殿（1786頃）、沖縄本島の中村家住宅（19c初期）が最古級なのです。このうち権現堂は臨済宗寺院桃林寺の鎮守ですが、三間社流造の神殿と寄棟造の拝殿は、細部の装飾や赤瓦の屋根など、沖縄独自の様式をもっています。この18世紀末の権現堂が、近世以前にさかのぼる本格的な様式の社寺建築として、沖縄に残された、たった一つの遺構となっているのです。

外来宗教・信仰の建築

琉球では遅くとも14世紀には寺院や神社が建てられていたようです。その後、琉球王国の庇護を受け、臨済宗の円覚寺や真言宗の護国寺、波上権現（波上宮）をはじめ、多くの社寺が創建されました。



波上宮 琉球八景の一つ「筍崖夕照」

日本からと同じように中国からも仏教（臨済宗）をはじめ道教、民間信仰などが伝来しました。明との外交・貿易を担った那覇港にほど近い地域、波上では、古琉球期の15世紀前半には中国・福建から渡来した人たちによって航海安全の天妃宮（天后宮・媽祖廟）と道教の天尊廟、また大安禅寺などが建てられていました。

波上には波上権現と護国寺もあったので、宗教・信仰の聖地をいうこともできるでしょう。

那覇港の建設にあわせて造営された港町「那覇」（狭義の那覇）にも、第一尚王統の尚巴

志王によって下天妃宮や龍王殿、沖権現・臨海寺が創建されています。那覇港の近くに国際的な宗教・信仰施設が配置されたのです。



波上 天尊廟（左）と天妃宮（右）



波上 波上宮と護国寺

近世琉球の時代、17世紀にも新たな信仰がもたらされました。中国古来の土地神、「土帝君」を祀るものです。沖縄では農業や漁業、また悪魔祓いの神としても信仰されています。
瀬底土帝君は、本島北部の本部半島の西端



瀬底土帝君

近くに位置する瀬底島にあり、県内最大級の規模をもっています。珊瑚岩の石垣によって整然と区画された敷地に、赤瓦葺（もとは茅葺）、石造の本殿や拝殿が中軸線上にならびます。18世紀中頃の建設とみられています。

グスクと御嶽

さて、沖縄文化遺産はいずれもが特色豊かなのですが、なかでも独自性の色濃いグスクと御嶽は代表的な沖縄文化遺産といえるでしょう。

300あまりのグスクとおよそ1000以上あるともいわれる御嶽は、沖縄・琉球の歴史と文化の核心をなすものです。また、ウチナーンチュの‘こころ’と深く結びついた‘ところ’ということもできるでしょう。グスクと御嶽は、ほかのだれよりもウチナーンチュにとって、きわめて大切な文化遺産であることはいまでもありません。とはいえ、グスクと御嶽はまた、「顕著な普遍的価値」をもっています。それゆえに、2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産リストに登録されたのでした。

この構成資産は、なきじんじょうあと今帰仁城跡、ざきみじょうあと座喜味城跡、かつれんじょうあと勝連城跡、なかぐすくじょうあと中城城跡、しゅりじょうあと首里城跡の5つのグスクと、しきなん玉陵（玉御殿）、せいふろウキ園比屋武御嶽石門、しきなん識名園、せいふろウキ斎場御嶽の4つの関連遺産からなっています。

5つのグスクは、琉球の歴史と文化を語るうえで欠くことのできない巨大グスク・大型グスクの遺跡（史跡）であり、また長期にわたった琉球の社会空間構造の象徴です。

4つの関連遺産は、いずれも琉球王国・王権に深くかかわる資産で、王家の陵墓（国宝・史跡）、御嶽の門（重要文化財）、王家の庭園（特別名勝）、琉球王国至高の聖地（史跡・名勝）です。

名称からすぐに御嶽とわかるのは斎場御嶽と園比屋武御嶽だけです。しかし、グスクということばにはもともと「城郭」と「聖域」（「御嶽」）の意味がありましたが、そのこと

が示唆するように、多くのグスクはそのなかに御嶽があります。



龍潭から仰ぎみる首里城



識名園（南苑）

たいへん興味深いことですが、5つのグスクにもすべて御嶽があります。今帰仁グスクや首里グスクの御嶽は、斎場御嶽とともに琉球開闢神話と深い関わりがあり、とくに有名で重要な御嶽なのです。玉御殿が御嶽でもあるとすると、9つの構成資産のうち、識名園



斎場御嶽

を除いた残りはすべて御嶽を内包するという事です。古来より現代にいたるまで継承された沖縄固有の信仰の形態を残す希少な証拠として、価値が評価されたのでしょう。

首里城——沖縄・琉球の歴史と文化の象徴

およそ500年にわたって琉球王国の政治拠点そして国王の宮殿となったのが首里グスクです。面積が4万㎡をこえる巨大な複郭構成のグスクです。主郭は正殿と御庭が中心となっています。王権にとって重要な首里森御嶽や真玉森御嶽などの御嶽もありました。首里グスクが、首都首里の都市形成の核となり、地域統合のシンボルとなったのは当然のことでしょう。

第二尚王統の時代、それも16世紀に入ると、多くのグスクはその機能を失い、遺跡となっていました。その結果、「グスク」ということばは、生きている唯一のそして最大のグスク、すなわち首里グスクを指すようになりました。首里城正殿もまた、唯一のそして最大のグスク正殿となり、いくどか火災に見舞われながらも再建され、近代には沖縄神社拝殿として利用されるなどしながら、沖縄戦まで存続しました。

1992年に史資料にもとづいて正確に復元された首里城正殿は、世界遺産登録に際しても「今や琉球の人々の誇りを象徴する偉大なモニュメントとなっている」と評価されました。しかし、2019年10月31日、突然の火災により首里城正殿をはじめ復元建物群は全焼してしまいました。

沖縄の文化遺産は、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が体现するように、東アジア、さらにはユーラシアのなかで独自の特色をもつ沖縄・琉球の歴史と文化を伝えていきます。

沖縄県の文化遺産リスト

種 別	遺 構
世界文化遺産	今帰仁城跡（なきじんじょうあと、13c末～）、勝連城跡（かつれんじょうあと、13・14c～）、首里城跡（しゅりじょうあと、14c中～）、座喜味城跡（ざきみじょうあと、15c前～）、中城城跡（なかぐすくじょうあと、15c中～）、玉陵（たまうどうん、1501）、園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん、1519）、識名園（しきなえん、1799）、斎場御嶽（せーふあうたき）
国宝（建造物）	玉陵（たまうどうん、1501）
重要文化財（建造物）	〔本島〕 旧円覚寺放生橋（ほうじょうばし、1498）、玉陵（たまうどうん、1501）、天女橋（てんによばし、1502）、園比屋武御嶽石門（1519）、旧崇元寺第一門及び石牆（そうげんじだいいちもんおよびせきしょう、1527以前）、伊江御殿墓（いいうどうんばか、1687）、瀬底土帝君（せそことーていーくん、1751-1829）、喜友名泉（ちゅんなーがー、1751-1829）、中村家住宅（19c初期）、新垣家住宅（19c後期）、津嘉山酒造所施設主屋（つかやましゅぞうしょ、1928）、仲村渠樋川（なかんだかりひーじゃー、1912）、大宜味村役場旧庁舎（おおぎみそんやくばきゅうちようしゃ、1925） 〔伊是名島〕 玉御殿（たまうどうん、1688）、銘苺家住宅（めかるけじゅうたく、1906） 〔慶留間島〕 高良家住宅（たからけじゅうたく、19c後半） 〔久米島〕 旧仲里間切蔵元石牆（きゅうなかざとまぎりくらもとせきしょう、1716-1735）、上江洲家住宅（うえずけじゅうたく、1754頃） 〔宮古島〕 豊見親墓 あとんま墓（とうゆみやばか あとんまはか、1830-1867） 〔石垣島〕 旧和宇慶家墓（きゅうわうけいけはか、17c）、旧宮良殿内（きゅうみやらどうんち、1751-1829）、権現堂神殿・拝殿（ごんげんどう、1786頃）、旧和宇慶家墓（きゅうわうけいけはか、17世紀後期頃） 〔竹富島〕 旧与那国家住宅（きゅうよなぐにけじゅうたく、1913）
特別名勝	〔本島〕 識名園（1799）
名勝（庭園）	〔本島〕 首里城書院・鎖之間庭園（しゅりじょうしょいん・さすのまていえん）、伊江殿内庭園（いいうどうんちていえん）、伊江殿内別邸庭園（いいうどうんちべつていえん） 〔石垣島〕 宮良殿内庭園（みやらどうんちていえん）、石垣氏庭園（いしがきしていえん）
重要文化的景観	今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観 北大東島の隣鉾山由来の文文化的景観
重要伝統的建造物群	竹富町竹富島（たけとみちようたけとみじま）重要伝統的建造物群保存地区 渡名喜村渡名喜島（となきそんとなきじま）重要伝統的建造物群保存地区

第4話 「琉球」発見 ～大切な記憶がよみがえる

琉球・沖縄にとって重要な歴史的事実を明らかにした、二つの「琉球」発見を取りあげましょう。「旧都浦添」と「琉球建築」の発見は、いずれも琉球の歴史と文化を正しく深く理解し直すことにつながりました。新たな史実や価値を知ることができ、沖縄と世界のウチナーンチュの大切な記憶がよみがえることになったのです。

一 「旧都浦添」の発見——史実を知る

もう1世紀以上も前、明治38年(1905)に『琉球新報』紙上に発表された、伊波普猷(1876-

1947)の「浦添考」^{うらそえ}がその発端となりました。のちに「沖縄学の父」と呼ばれることになる伊波は、そのとき東京帝国大学の学生でした。伊波は、数年後の1911年に処女作『古琉球』

を刊行しますが、そこに「浦添考」も収録され、浦添が首里以前の王都であることが世に知られるようになります。

固定観念からの解放——伊波普猷と東恩納寛惇

この浦添旧都説が革新的なのは、疑われることのなかった社会通念を打破したからです。それまでは、琉球最初の王統と古くから伝わる天孫の時代から近代まで、変わることなく首里が国都であったと信じられていました。伊波は、そうした常識をくつがえし、近代の学問によってあらたな琉球史像を提示したのです。

16世紀の尚真・尚清王の時代には、伝説的な天孫はともかく、その後の舜天・英祖・察度の三代の王統、すなわち中山王権を正しく承継ぐのが第二尚王統であるという意識があったといわれています。一貫して琉球国都たる首里を継承しているということもまた、琉球王権の正統性を示す証左であったのでしょう。

伊波普猷は、浦添ははたしていかなる所であったのか、を課題としました。そして「うらおそい」が「うら（浦）おそふ（襲）」という言葉の名詞形で、浦々を支配するところ、国を治めるところ、という意味をもっていると考えました。そうして、浦添は首里以前においては「沖縄島の中心」であっただろう、と述べたのです。伊波自身は、浦添を古都とも旧都とも都とも書いていないのですが、仮説として浦添旧都説を提示したと考えてよいのではないのでしょうか。

伊波から4年後、沖縄歴史研究の先駆者である東恩納寛惇（1882-1963）は、「浦添村」の解説で、「ウラオソイ」は「浦々を支配する」の義なる事已に島尻郡の条下にも説きたり。首里以前の王都といふ」と記しました（『大日本地名辞書 続篇（第二 琉球）』富山房、1909。のちに『南島風土記——沖縄・奄美大島地名辞典』沖縄文化協会・沖縄財団、1950）。

「島尻郡の条」には、「しまおそひ」は「うらおそひ（浦添）」などの「おそい」と語源

が同じで、「共に島を支配するの義なりと曰ふ、此説已に文学士伊波普猷氏の称ふる処たり」とあります。伊波説に賛同し、しかもよりも強く「首里以前の王都といふ」と述べ、さらに史料をあげて浦添旧都説を強化しました。

ところで、伊波普猷は1932年の『琉球新報』紙上に、「首里」の語源は結局わからない」という一文を発表しました。興味深いのは、タイトルとその内容もさることながら、副題が「東恩納学士の浦添旧都説を裏書きすべき一史料」となっていることです。そして本文冒頭にも「初めて浦添旧都説を唱へた同君」とあります。伊波は、浦添旧都説の提唱者を東恩納寛惇と考えていたのです。

この小論文は、1933年（昭和8）から1年間東南アジアや中国を探訪することになった東恩納の門出を祝うために書かれた献呈論文で、『明実録』を史料として東恩納の浦添旧都説を補強しました。

そこには旧稿「浦添考」について率直な反省も記されています。伊波は「古くは浦添の範囲が今日よりも広く、首里を中心とした牧湊、泊、那覇の三港を抱有する地域であったに違ひないなどと無理な臆測をして、浦添城を中心とした所に国都のあったといふことには気がつかなかった」といいます。一方、東恩納の浦添旧都説については、「当時の中山の国都は浦添であったに違ひないと喝破された。沖縄の正史には遷都の記事がないからといって、疑ひを挟んだ人もあったが、私は早速同君の説に敬意を表した」とあります。

伊波普猷の『古琉球』と東恩納寛惇の『南島風土記——沖縄・奄美大島地名辞典』は、ともに版を重ねました。二人がそれぞれの所説を補いあったことが、いっそう浦添旧都説を普及・定着させたのでしょう。1983年刊行の『沖縄大百科事典』では、「首里以前の古都として知られている」となっています。

王都浦添と「琉球国中山王」察度の時代

琉球王国時代の第二尚王統は、自身を舜天王統・英祖王統・察度王統の系譜に位置づけ

ていました。舜天王統は王が存在したかどうかもさだかではありませんが、浦添を王都とした察度王統がたしかな歴史的事実であることは、明の歴代朝廷が編纂した『明実録』から明らかです。

この察度王統の王都「浦添」は、どのような都市なのでしょう。

その中核はいうまでもなく浦添グスクです。沖縄本島の南部にあり、東南から西北にのびる細長い琉球石灰岩丘陵の東端、標高130m～140mのところを築かれています。南側は緩斜面、北側は断崖ですが、北の崖を掘り込んで浦添グスクの王の陵墓、「浦添ようどれ」が造られています。

浦添グスクの北方、西海岸には古くから利用された牧港がありました。一方、西南に少し離れた那覇島の一角、東シナ海に面した波上は、14世紀後半には海外諸国の船が出入りする新たな交易の港、海域アジアの交易にかかわる中国人などの海商の根拠地・居住地になっていました。日中間の航路、いわゆる「南島路」が活発化したことが港湾都市・波上を形成したのです。

14世紀後半、中山王の察度（在位1350～1395年）が拠点とした時期には、浦添グスクは石積みの城壁で囲まれた4万㎡をこえる大規模なグスクとなり、中心には瓦葺きの正殿が建てられていました。「癸酉年高麗瓦匠造」や「大天」などの銘のある「高麗系瓦」が大量に見つかっています。ほかに中国や高麗、東南アジア、日本との交易を示す遺物も、数多く出土しています。

圧倒的な規模のグスクを構築することができた最大の要因は、1372年明の太祖洪武帝の要請に応じて、察度の中山が明の冊封・朝貢体制下に入ったことでしょう。察度は、「琉球国中山王」として王権をはじめ政治・外交・経済の基盤を飛躍的に強固にし、さらには強大な明の権威を背景に海洋貿易国家への道筋を確立したのです。その一端を担ったのが、海港波上と新たな海商勢力（華僑）でした。

ところで、明の永楽帝は1404年琉球に使者

を派遣しました。1395年に死去した察度王をとむらう儀式「諭祭」をおこない、武寧を「琉球国中山王」に冊封するためです。これが琉球最初の冊封とされています。

こうした冊封に備えて、察度王や武寧は、どのような施設を用意していたのでしょうか。

冊封使を迎える「迎恩亭」、滞在施設の「天使館」などがあつたかどうかは不明なのですが、諭祭さらには祖先祭祀の場として不可欠な、歴代中山王の廟（後代の中山国王廟＝国廟）が建設されていたことは、疑えないでしょう。

察度・武寧王が国廟としたのは極楽寺（前王統の菩提寺）と考えてよいと思います。第二尚王統初代の尚円王は浦添に龍福寺を創建しましたが、それは極楽寺の由緒を引き継いだ「歴朝の宗廟」だったのです。

察度王はまた、王家の菩提寺として真言宗頼重法印を開山とする護国寺を創建しました。護国寺は浦添グスクの西にあり、のちに那覇の波上権現（波上宮）の隣に移りました。16世紀前半以降の護国寺は、「国家鎮守の祈願所」として第二尚王統と深いかかわりを持ち、その尊崇と庇護のもと真言宗首位の寺院として、臨済宗首位の円覚寺とともに、琉球の宗教社会において重要な位置を占めました。

以上のように、浦添グスクの周辺には王陵「浦添ようどれ」や王家の菩提寺護国寺、国廟の極楽寺などの寺院があり、また大きな池、豪族屋敷などがあつたことが判明しています。「琉球国中山王」察度の王都浦添は、統一琉球王国の首都首里に先行する構成を備えていました。というよりも、第一尚王統の首里が、浦添の基幹施設の配置ないし都市構造を踏襲したのでしょう。

浦添ようどれと察度王陵の謎

「旧都浦添」が発見され、定説となったことにより、琉球王国成立以前の中山王のグスクを浦添グスク、その陵墓を浦添ようどれとする説も定着しました。浦添ようどれは東室

(上位)と西室(下位)からなりますが、西室が英祖王、東室が第二尚王統の尚寧王と伝わり、そのように信じられています。

浦添グスク最盛期の中山王、察度は、どこに葬られたのでしょうか。



浦添ようどれ
手前が英祖王陵、奥が尚寧王陵とされています。

二 「琉球建築」の発見——価値を知る

伊東忠太と沖縄調査

伊東忠太(1867~1954)は、建築史学者として日本建築史と東洋建築史を体系化し、歴史的建造物の保存に尽力しました。また1902年から中国・インド・トルコに留学し、その後ヨーロッパなどを歴訪しています。帰国後の1905年、東京帝国大学工科大学教授に就任しました。一方、平安神宮(1895)・明治神宮(1920)などの創建神社を設計するなど、建築家としても活躍しました。

伊東は、1924年7月末から20日間、沖縄に滞在して、歴史的建造物の現地調査を実施しています。背景・動機には、鎌倉芳太郎とともに琉球芸術の研究を開始したこと、また取り壊し寸前であった首里城正殿の保存に取り組んでいたことなどがありました。出発前には東京で東恩納寛惇に会って、親しく沖縄の事情を聞き、また沖縄では伊波普猷とも会っています。しかし、おもしろいことに、伊東は首里城について「天孫氏の時代から国王の居城であったと考えられている」と書いています。伊波も東恩納も、「浦添旧都」説を説

明しなかったのでしょうか。

それはともかくとして、調査の成果は、滞在中の講演会で発表され、帰京後も講演や雑誌『科学知識』連載などを通じて公表されています。数年後に「琉球紀行」と題して著書『木片集』(萬里閣書房、1928)に収録され、好評を博しました。その後、加筆・上梓されたのが、『琉球——建築文化——』(東峰書房、1942)です。

琉球建築の評価

価値あるものとは思われず、取り壊されていた「琉球建築」を、伊東はどのようにみたのでしょうか。感想・評価の一端を紹介しておきましょう。

園比屋武御嶽石門は、「琉球固有の宗教建築で今日現存する最善最美なもの」であり、全体の姿が「得も云はれず美しい」といっています。玉陵(玉御殿)は、「何等建築としての奇も巧もないが、慥かに崇高偉大な建築」と評しています。しかしながら、実は「奇も巧も」豊かな建築といえるでしょう。

首里城正殿は、「琉球建築の代表的大作」と述べていますが、崇元寺第一門・石牆と比較するなかで、伊東の評価の内実がよくわかります。

崇元寺石門の評価はたいへんおもしろいので、長文ですが、引用します(表記は常用漢字・現代語に改めています。括弧内は引用者の注記です)。

一見最近の西洋式ハイカラ建築のようで、これこそ実際琉球随一の美建築であると断言するに躊躇を要しない。首里城正殿は由緒の尊いのと規模の壮大と手法の特殊とを以て優るが、美の点に於ては完全無缺とは云えない。圓覺寺の殿門は様式の純真と手法の確實とを以て勝るが、獨創的意匠は豊富とは云へない。

しかるにこの門は規模は大きくなく、手法は簡単であるが、その中央部と左右翼との取り合せの自然なこと、その相互の広表幅員の權衡(バランス)を得たこと、その全部の輪郭が簡明で要を得たこと、

その線が少なく一つも無駄のないことなど、数え
ると限りない美点が現われて来る。一見素朴なよう
で、よく凝視すると益益豊富である。一瞥粗野に見
えるが、よく観察するといよいよ高雅である。極めて
無造作なるに似て、実は苦心惨澹の作であり、甚
だ浅薄なるに似て、重厚深刻の作である。要するに
この門は旧来の因襲に拘泥せず、新たに独創的意匠
を試みたもので、清新澀刺な気分が横溢している。
この時、この地においてこの建築に邂逅したのは私
の最も意外とする處である。

この批評のスタンスは、建築家伊東忠太の
面目躍如というところでしょうか。

伊東忠太と「琉球建築」

ところで、「琉球建築」ということばを、
伊東はもともと琉球王国時代の建築の総称と
して使っていました。しかし、「特色ある風
土と歴史から生まれた琉球固有の文化、その
文化の表現である独特の墳墓・橋梁・神社・
仏寺・宮殿・民家・廟など」を調査するうち
に、伊東はそれらの価値に気づきました。そ
れらは「芸術の燦然たる光輝」を放っていた
のです。伊東は「古き伝統と不滅の輝きをも
つ琉球芸術」、すなわち「琉球建築」を発見
したのです。

伊東は「琉球建築」をどのように理解し
ようとしていたのでしょうか。枠組のキー
ワードはすでに明らかでしょう。琉球、風土、歴
史、文化、芸術、建築などです。そして伊東
は、東洋建築という広大な世界のなかに、新
たなカテゴリー「琉球建築」を位置づけよう
としたのです。伊東は、「琉球建築」は東洋
建築の一方の勢力である中国系統の建築の一
分派であって、朝鮮、日本、ベトナム、台湾
などと肩を並べるべきである、と主張してい
ます。

那覇滞在中に開催された講演会の要旨をも
とに、当時の野帳や『琉球——建築文化——』
も参照しながら「琉球建築」の枠組を図式化
すると、次のようになるでしょう。

①分類（宗教—非宗教）→細分類

宗教建築：琉球固有の神祠、(外来の)神社・
仏寺・道観（道教）・文廟（儒教）

非宗教建築：陵墓、城堡（グスク）、宮殿・
邸宅、農家・倉、橋

②類例と説明、価値の評価

③特色——(1)古調、(2)のんびりした気分、(3)
精巧・優美、(4)海外諸国の影響

④位置づけ——東洋建築のなかの「琉球建築」

⑤保存の意義——豊富で多彩な歴史的・芸術
的（建築的）価値の継承

伊東は、玉御殿・園比屋武御嶽石門・崇元
寺・円覚寺・首里城正殿などそれぞれの価値
を見出し、それらの建築文化遺産を基礎とし
て、整然と「琉球建築」を構築しました。そ
して、「琉球建築」の地域的・歴史的・文化
的価値、さらに芸術作品としての建築的価値
を高らかに褒め讃え、その保存を強力に推進
しました。

こうして表舞台に登場した独自の「琉球建
築」は、2000年には世界の脚光を浴びること
になりました。「顕著な普遍的価値」が認め
られ、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」
として世界遺産リストに登録されたのです。

●おわりに——アイデンティティの再発見

神話・伝説からヒストリーへの転機となっ
た「旧都浦添」の発見は、古都首里の再発見
でもありました。独自の「琉球建築」を自覚
したことは、伊東忠太が期待したように、独
自の建築文化の創生に結びついたのではない
でしょうか。

大切な記憶をよみがえらせる「発見」は、
ほかにいくつもあるでしょう。時代名称とも
なっている「グスク」の発見や、地域の自然
と歴史と文化を鮮烈に切りとる「琉球八景」
の発見も、沖縄のアイデンティティの再発見
につながり、大切な記憶がよみがえる事例の
一つなのかもしれません。

木材保存

常務理事 今村 祐嗣

第12話

木と年齢

まず写真12-1をご覧ください。これはスギの幹を輪切りした円盤ですが、中心の髄から外に向かって15年輪くらいまでは未成熟材、それより外側は成熟材と区別されます。一般的に、内側の未成熟材の部分は外側の成熟材に比べて強度性能が低く、吸放湿にともなう膨張収縮が大きい（狂いやすい）という性質があります。木材利用の観点からは注意しなければならない重要なポイントです。

この年輪部位による材質変化の指標の一つに細胞の長さがあります。薬剤で木材を分解してばらばらの細胞（スギの場合は仮道管）にし、その長さを測ってみると、中央の髄の辺りが一番短く、徐々に伸長して15年輪付近でほぼ安定してきます（図12-1）。

では、どうして髄に近い部分は未成熟で、一定の年数を経ないと材質の安定した成熟材にならないのでしょうか。樹木の幹は上に伸びる（上長成長）とともに、横に太って（肥大

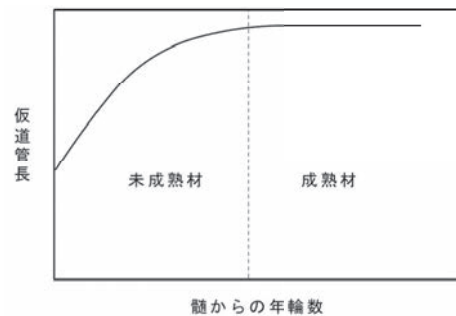


図12-1 成長に伴う仮道管の長さの推移
（点線はほぼ15年輪）

成長）大きくなって行きますが、この肥大成長は樹皮の直下にある形成層という組織が分裂することによって新しい細胞を内側につくり、形成層自身は外に広がることによって起こります。形成層自身は幹の先端にある頂端分裂組織から分化したものですので、幹のそれぞれの高さにおける形成層は年輪の数と同じだけの年数を経ていることとなります。

写真12-2のスギの高木をご覧ください。この木は植えられてから100年を経過しているとしますと、根株近くでは形成層は100歳、先端部分の形成層は産まれたてということになります。すなわち、写真12-1のような幹の断面では、髄の近くの年輪の細胞は形成層がまだ若い時に形成されたもの、外側にある年輪の細胞は形成層が一定の年齢に達して（成熟して）つくられたものといえます。

したがって、図12-2の模式図のように、未成熟材の範囲は幹の上下に関わりなくほぼ15

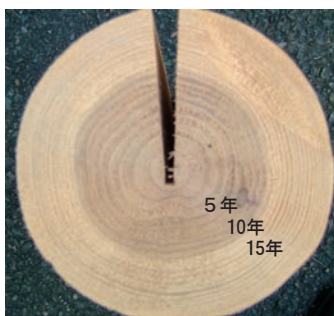


写真12-1 スギの円盤
（数字は中心の髄からの年輪数）



写真12-2 樹齢100年を超えるスギの高木

年輪より内側で一定ですので、比率では根株に近い部分ほど成熟材の割合が大きく、上に行くほど未成熟材の占める割合が大きくなります。よく、20年生くらいまでの間伐材を利用する時は強度的性質や乾燥後の狂いに注意をはらう必要があると言われるのは、まだ材質の安定した成熟材が十分に形成されておらず、未成熟材の占める割合が大きいことによります。今、仮に20年輪の丸太を想定し、中心付近の年輪幅が4mmとしますと、丸太の中心から15年輪に該当する半径6cm以内の部分は未成熟材ということになります。そこから心持ちの正角材を製材しますと、ほとんどを未成熟材が占めることになり、中心部を外した心取り材に比べて強度が劣ることが考えられます。

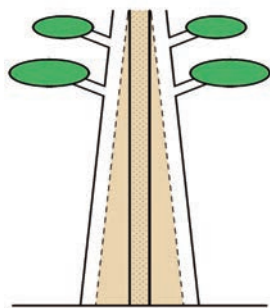


図12-2 樹幹の髄を通る縦断面の模式図
(中央の太線で囲まれた点を打った部位は未成熟材、薄茶の着色部は心材)

一方、未成熟材・成熟材という区分は、辺材・心材（木材保存第1話「白太と赤身」）とは明確に分けて考えることが大切です。木材組織は年齢を経るにしたがって樹心の部分から外側に向かって心材化して行き、外周部が白っぽい辺材、それよりも内側は着色した心材として区分されることとなります（前掲の写真12-1では赤く着色した10年輪くらいまでが心材）。この着色した心材の部分は、図12-2に示しましたように幹の上では小さく、下の方ほど大きくなります。従って、一定の寸法で製材した正角材の木口を並べてみると（写真12-3）、材によって心材の占める割合が異なることで、その材が木の幹のどの高さから採材されたかが分かります。

辺材と心材は耐朽性、耐蟻性、耐虫性で大きな差があり、心材は辺材に比べて腐りにくく、シロアリや木材加害昆虫に対する抵抗性も高いですが、この理由は防腐や防虫に効果がある成分が心材化に伴って沈着してくることによります。一方、未成熟材と成熟材にはこういった耐久性に関連する性能で違いはありません。

さて、安定した材質の成熟材の域に達した木材組織はどんどんと肥大成長を続けますが、100年、200年という太い木になった後はどうなるのでしょうか。

樹木には高齢になったことで形成される特異な木部があります。筆者が樹齢600年近く



写真12-3 スギ製材品の木口面
(辺心材境界の白色部は心材への移行材部)

の奈良県産の春日杉で調べたところでは、200～250年が高齢化の目安と考えられました（図12-3）。これ以降の材を木材組織としては「過熟材」と呼んでいます。

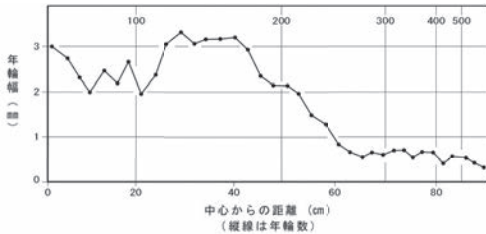


図12-3 高齢のスギ横断面における年輪幅の推移

一番の特徴は年輪幅がきわめて狭く、0.5ミリ前後の超過密の年輪を構成するようになり、顕微鏡で観察すると1年輪に早晚材合わせても10細胞くらいしか並んでいませんでした（写真12-4）。ちなみに平均年輪幅が3～4ミリの通常のスギでは100細胞以上を数えることができます。過熟材では強度も低下し、特に引張強さにこの傾向が著しく、春日杉で測定したところでは成熟材に比べて2/3程度でした。この理由として、細胞壁のフィブリル傾角が緩やかなこと、成分的にセルロース量が少なくてリグニンが多いことが指摘されています。また、一方で、通常のスギでは数%にも達しないフェノール類やテルペンといった抽出物の量が高齢化した材では20%ほどにも達することがあります。その結果、独

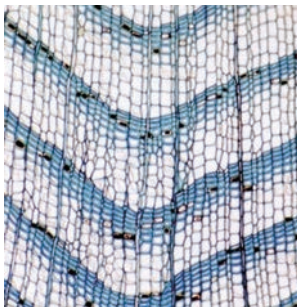


写真12-4 春日杉の木口面の光学顕微鏡写真

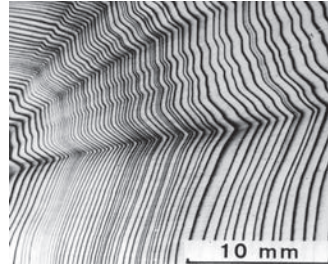


写真12-5 同木口切片の軟X線写真



写真12-6 春日杉の笹杵の出現
（上：木口面、下：板目面）

特の色艶がかもし出され、総体的に耐腐朽性も高くなります。

さらに注目されるのは、真円状に生長してきた年輪がしゅう曲して「しわ」を形成することです。同時に早晚材のコントラストが著しくなり（写真12-5）、その結果、板目面に笹杵など美しい木目がくっきりと現れます（写真12-6）。老齢化して年輪が波打つ現象はレッドウッドやバイスギなどにもみられますが、スギの場合がとくに顕著であり、霧島杉や屋久杉など各地の高樹齢のスギにも認められます。

このように樹心から15年輪くらいまでは未成熟材、それより外側の材質の安定した部分は成熟材、さらに高齢になって形成された部分は過熟材として区分されますが、英語表記では、それぞれジュベナイルウッド、アダルトウッド、オーバーマチュアウッドと表します。

参考文献

秋田県立大学木材高度加工研究所編：「コンサイス木材百科」、(財)秋田県木材加工推進機構、pp.313、1998

令和2年度 研究報告

件 名
土壌処理用防蟻剤の室内性能試験
新規木材保存剤の開発に伴う野外防腐・防蟻性能試験
プロフラニリド防蟻粒剤の性能試験
断熱材の防蟻性能
新規木材保存剤の JWPA 認定取得のための野外防腐・防蟻性能試験
福岡県護国神社 大鳥居柱足調査
熱分布センサーによる空調快適制御に関する研究
AI 空調快適制御に関する研究
アコヤウツドの野外耐久試験
プロフラニリド木部処理剤の性能試験
建築材料の防蟻性能評価
断熱材塗料の耐蟻性評価
住宅断熱用材料の防蟻性能評価
樞原本陣まちの本陣プロジェクトにおける基本計画提案
テープ材料の防蟻性評価
二条城本丸御殿玄関ほか2棟の柱、耐震等調査業務
高齢者施設の設計に関する研究

令和2年度 事業報告

(国宝、重文、府指定、史跡等の主な物件を計上)

令和3年3月31日現在

1. 文化財建造物に関する工事等 (完了)

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
勝鬘院塔婆	大阪市天王寺区	(宗)勝鬘院	R元.9.3~ R2.9.30	重文 保存修理
東大寺戒壇堂	奈良市	(宗)東大寺	R2.7.1~ R3.3.31	県指定 基本計画
京都府庁旧本館車寄等	京都市上京区	京都府	R2.6.25~ R2.11.16	重文 保存修理
元興寺極楽坊本堂ほか3棟	奈良市	(宗)元興寺	R2.8.3~ R3.1.31	現状調査
舞鶴旧鎮守府倉庫	京都府舞鶴市	舞鶴市	R2.8.3~ R3.3.31	重文 保存活用計画
京都府庁旧本館トイレ	京都市上京区	京都府	R2.8.20~ R3.2.26	重文 改修実施設計
旧勝田郡役所	岡山県勝田郡	勝央町	R2.7.1~ R3.3.31	国登録 技術検討支援
旧城山国民学校校舎	長崎市	長崎市	R2.11.5~ R3.3.12	原爆遺跡 予備調査支援
旧御所水道ポンプ室	京都市上京区	三菱UFJリサーチ & コンサルティング(株)	R2.11.18~ R3.3.31	国登録 技術検討支援

2. 文化財建造物に関する工事等 (継続)

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
旧吹屋小学校校舎	岡山県高梁市	高梁市	H27.8.21~ R4.3.31	県指定 修理 監理
田尻歴史館	大阪府泉南郡	田尻町	R元.6.19~ R4.11.30	府指定 耐震補強 保存修理 監理
波爾布神社本殿	滋賀県高島市	(宗)波爾布神社	R元.10.1~ R4.3.31	県指定 保存修理
本願寺築地堀	京都市下京区	(宗)本願寺	R2.5.15~ R5.3.31	史跡 保存修理
舞鶴旧鎮守府倉庫・需品庫3棟	京都府舞鶴市	舞鶴市	R2.5.15~ R3.9.30	重文 耐震診断
知恩院	京都市東山区	(宗)知恩院	R2.6.8~ R4.3.31	現況調査
旧西尾家住宅	大阪府吹田市	吹田市	R2.7.13~ R4.3.31	保存修理 実施設計 耐震設計
旧西尾家住宅外堀	大阪府吹田市	吹田市	R2.8.3~ R3.7.30	保存修理
賀茂御祖神社	京都市左京区	(宗)賀茂御祖神社	R3.3.16~ R3.5.31	破損調査

3. 特別史跡等に関する工事等（完了）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
鹿苑寺主参道	京都市北区	(宗)鹿苑寺	R2.5.11～ R2.12.31	特別史跡 修理 設計監理
鹿苑寺舍利殿	京都市北区	(宗)鹿苑寺	R2.9.1～ R3.3.31	特別史跡 屋根替 設計監理
彦根城内埋木舎	滋賀県彦根市	大久保治夫	R3.1.20～ R3.3.15	特別史跡 設計監理

4. 特別史跡等に関する工事等（継続）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
なし				

5. 文化財建造物防災事業（完了）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
萬福寺法堂	宇治市	(宗)萬福寺	R2.11.4～ R3.3.31	重文 消火 設計監理
姫路城	姫路市	姫路市	R2.7.9～ R5.3.30	国宝 自火報 防犯 消火 監理

6. 文化財建造物防災事業（継続）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
東大寺金堂(大仏殿)ほか22棟	奈良市	(宗)東大寺	R2.5.1～ R7.3.31	国宝・重文 防災 監理
「聴竹居」本屋ほか2棟	京都府乙訓郡	(株)竹中工務店	R2.6.16～ R4.3.31	重文 防災 設計監理

7. 社寺等日本建築（完了）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
勝尾寺薬師堂	大阪府箕面市	(宗)勝尾寺	H28.8.1～ R3.3.31	改築 設計監理
桂林寺本堂・客殿	栃木県宇都宮市	(宗)桂林寺	R2.12.1～ R3.2.26	新築 基本計画

8. 社寺等日本建築（継続）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
華嚴寺客殿	京都市西京区	(宗)華嚴寺	H27.7.30～ R4.12.20	新築 設計監理
大阪成田山新山門	大阪府寝屋川市	(宗)成田山明王院	H28.11.28～ R6.6.30	新築 設計監理
勝尾寺閻魔堂	大阪府箕面市	(宗)勝尾寺	R元.5.24～ R3.3.31	改築 監理
総本山智積院金堂	京都市東山区	(宗)総本山智積院	R2.9.1～ R4.3.31	補修 設計監理
興正寺御影堂	京都市下京区	(宗)真宗興正寺	R3.1.18～ R3.9.30	保存修理 設計監理

9. 耐震診断・建物耐震性能評価等（完了）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
神田神社本殿	滋賀県大津市	滋賀県	R2.6.17～ R2.11.27	重文 耐震診断
西川家住宅主屋ほか1棟	滋賀県近江八幡市	滋賀県	R2.6.23～ R3.3.8	県指定 耐震診断
旧春日大社板倉(円窓)	奈良県奈良市	(一財)京都伝統建築技術協会	R2.7.1～ R2.9.30	重文 耐震補強実施設計
杉本家住宅	京都市下京区	(公財)奈良屋記念杉本家保存会	R2.7.2～ R3.3.31	重文 耐震診断
奈良県立民俗博物館旧白井家住宅	奈良県大和郡山市	奈良県	R2.7.3～ R3.3.19	重文 耐震診断
聖護院書院	京都市左京区	(宗)聖護院	R2.7.10～ R3.3.31	重文 耐震診断
真宗本廟東本願寺阿弥陀堂門及び手水屋形	京都市下京区	(宗)真宗大谷派	R2.7.16～ R3.3.31	重文 耐震診断
旧トーマス住宅	兵庫県神戸市	神戸市	R2.7.22～ R3.2.26	重文 耐震診断
石田家住宅	京都府南丹市	南丹市	R2.12.1～ R3.3.26	重文 耐震診断
旧与那国家住宅	沖縄県八重山郡	OFFICE 萬瑠夢	R2.12.11～ R3.3.31	重文 耐震診断

10. 耐震診断・建物耐震性能評価等（継続）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
新発田城 表門及び旧二の丸隅櫓	新潟県新発田市	新発田市	R2.5.12～ R5.3.15	重文 耐震診断
舞鶴旧鎮守府倉庫・需品庫3棟	京都府舞鶴市	舞鶴市	R2.5.15～ R3.9.30	重文 耐震診断
鬮鷄神社本殿・上殿	和歌山県田辺市	(宗)鬮鷄神社	R2.9.1～ R3.9.30	重文 耐震診断
旧西川家住宅	滋賀県近江八幡市	近江八幡市	R2.10.1～ R3.6.30	重文 耐震診断
京都御所第54号建物(御文庫)	京都市上京区	(株)西澤工務店	R2.10.14～ R3.10.29	耐震診断
名勝和歌の浦観海閣	和歌山県和歌山市	(公財)和歌山県文化財センター	R3.2.17～ R3.9.30	耐震診断

11. その他（完了）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
東大寺公慶堂	奈良県奈良市	(宗)東大寺	R2.4.3～ R3.3.31	特別史跡 設計監理
正倉院持仏堂	奈良県奈良市	(株)西澤工務店	R2.8.12～ R3.3.26	耐震診断

12. その他（継続）

建造物名	所在地	委託者	工事期間	備考
京都御所清涼殿	京都市上京区	(株)西澤工務店	R元.9.17～ R4.3.14	整備 調査

編集後記

令和3年(2021年)10月

会誌第35号をお届けいたします。

本号には、小椋大輔先生（京都大学大学院教授・工学研究科建築学専攻）から「遺跡や歴史的建物における文化財保存のための環境制御」をご寄稿いただきました。生活空間環境制御学がご専門の小椋先生は、「ハギア・ソフィア大聖堂、敦煌莫高窟などの壁画の保存」や、「古墳、磨崖仏など石造文化財の保存」も研究テーマとされています。重要文化財建造物には障屏画や天井画をもつもの、さらにそれらが絵画作品としても文化財指定されているものも少なくありません。「環境を制御する保存」の視点から、そうしたケースの建造物保存修理のありかたを再検討することが必要ではないかと感じました。

当協会の保存修理工事の現場から、野々部万美恵（主幹研究員）が特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）の屋根葺き替えや金箔などの工事について報告しました。金閣は今回の修理によって久しぶりに本来の美しさを取り戻しています。私自身は、こけら葺の屋根と金箔がみごとに調和する竣工時の姿にたいへん驚きました。もともと足利義満が創建したものなので、屋根材は義満の身分地位にふさわしく、当然、最上級の檜皮と思い込んでいたのですが、観音殿（金閣）はそうした常識や格式をこえて、造形美を強く意識したものであることをあらためて痛感しました。ただ、新しい金閣の美しさも、風雨などによるこけら板の劣化のため、わずか数ヶ月しか持続しないようです。無念なことです。

中尾正治業務執行理事の「瓦大工橘氏の瓦銘」は、室町時代法隆寺の「瓦大工」橘吉重を源流とする橘氏が残した瓦銘について、新知見です。今村祐嗣常務理事による連載コラム「木材保存」第12話は、木の成熟と年齢、また年輪の形成についての興味深い物語です。大正期の近代和風建築では天井材として霧島杉や屋久杉の美しい笹杵が好まれています。その笹杵がどのようにしてできるのか、初めて知りました。高橋は「【琉球建築】史話」と題して、〈琉球建築〉の歴史、その特色や魅力をお伝えしたいと考えています。次号以降、連載することができれば良いのですが。

最後にご報告を申しあげます。本年春の叙勲におきまして理事中尾正治が「旭日双光章」を受章されました。保存修理技術者として長年にわたって文化財建造物の保存に力を尽くされたことによるものです。

高橋康夫

建築研究協会誌 第35号

令和3年(2021年)10月31日

発行 一般財団法人 建築研究協会

〒606-8203 京都市左京区田中関田町43

電話 075-761-5355

FAX 075-751-7041

印刷 有限会社 木村桂文社

Architectural Research Association

35

2021 • 10